

大型古墳の分布 墳丘が100m以上と推定される古墳の分布。全部で326基で、奈良県75基、大阪府51基となっている。(朝日百科『日本の歴史』別冊「歴史を読みなおす」2)

5 古墳はなぜつくられたのか

4～5世紀の東アジアと日本列島

中国は北方の諸民族の侵入をうけ、5世紀半ばまでに南北に分裂した状態となった。こうしたなか、

中国周辺のいくつかの地域で国家形成が進んだ。朝鮮半島北部では、中国東北部からおこった高句麗が、313年に楽浪郡を滅ぼした。南部においても百濟、新羅が国家形成へと向かった。日本列島においても、遅くとも3世紀後半には、現在の奈良県を中心とする近畿地方の有力豪族が連合して政権をつくり(ヤマト政権)、4世紀前半ころには東北南部から九州北部にその地域を拡大した。

4世紀後半から5世紀にかけて、朝鮮半島では、高句麗・百濟・新羅の3国が対立抗争をくり返した。高句麗が新羅を支配下に入れる一方、百濟は倭国と同盟関係を結んで、これに対抗した。奈良県石上神宮所蔵の七支刀の銘文や高句麗好太王碑文からうかがえるように、4世紀末に倭国は百濟の求めに応じて、海を渡って高句麗と戦っている。

前方後円墳の出現とヤマト政権の形成

弥生時代の終わりころから、日本列島各地に有力な首長の墓として、さまざまな形の墳丘をもった墳墓がつくられるようになった。そうした各地の墳墓がもついくつかの要素を総合して、3世紀なかごろ、奈良盆地に大きな墳丘をもつ前方後円墳が出現した。その規模や副葬品から判断すると、弥生時代の首長とはくらべものにならないほど強大な力をもつ支配者が存在したことがわかる。箸墓古墳をはじめとする初期の前方後円墳が、奈良盆地に集中することは、これらの被葬者と初期ヤマト政権との関係が深いことを示している。

4世紀後半から5世紀にかけて、近畿地方を中心に前方後円墳は急速に巨大化した。大阪湾にのぞむ河内平野に築造された菅田



4世紀ころの朝鮮



好太王碑 丸都(高句麗の都、現在の中国吉林省集安県)に建立された高句麗の好太王(広開土王)一代の功績を顕彰した石碑(高さ約6.2m、一辺2mの方柱)。四面に書かれた約1800字の碑文には、倭国についても記されており、4世紀後半から5世紀にかけて、倭人が海を渡って戦ったと記述されている。

七支刀 両面に約60文字の銘文があり、369年、百濟王子が倭王のためにつくったと記しているが、解釈には諸説ある。(全長75cm、奈良県、石上神宮蔵)

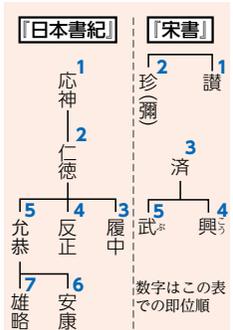


大山古墳 仁徳天皇陵と伝えられている。堺市百舌鳥古墳群の中心的存在。墳丘長486m、高さ35m。墳丘に用いられた土の運搬などに、のべ680万7000人を要し、円筒埴輪だけで2万本が使われていたと推定される。

倭の五王と天皇 『宋書』倭国伝などには、413年から6世紀はじめにかけて、5人の倭王の名を記している。このうち、以下の3人は、『古事記』や『日本書紀』(→p.34)に記される允恭・安康・雄略天皇に、讀は応神・仁徳・履中天皇のいずれかに、珍は仁徳・反正天皇のどちらかにあてる説がある。



武人埴輪と甲冑 甲冑姿の埴輪(群馬県太田市出土、高さ69cm、東京国立博物館蔵)と当時の甲冑(滋賀県栗東市出土、安土城考古博物館蔵)。



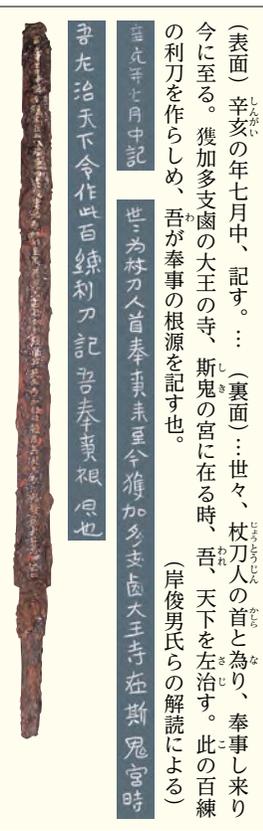
稲荷山古墳出土鉄剣銘 銘文中の「辛亥」年は471年とし、「獲加多支箇」は雄略天皇とする説が有力である。(文化庁蔵)

御廬山古墳(応神天皇陵)や大山古墳は、世界最大の規模をもつ墳墓であり、ヤマト政権のなかからとくに大きな力をもった首長(大王)が出現したことを示している。中国の歴史書『宋書』倭国伝にみえる倭の五王や、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘、熊本県江田船山古墳出土鉄刀銘などに記された「大王」の文字もそのことを裏づけている。前方後円墳は、6世紀までに九州の鹿児島県から関東地方、東北地方の岩手県まで広がり、ヤマト政権の影響力がこれらの地域におよんだことを示している。

中国・朝鮮との政治的・軍事的な交流が深まった5世紀以降は、先進的な文化・技術が継続して日本列島に伝えられた。中国や百濟・新羅などの王朝の技術援助もあるが、戦乱の朝鮮を避けて渡来した人々の活躍も大きい。渡来人たちは、東アジア世界の共用文字となる漢字を駆使して、政府の記録や出納、外交文書などの作成にあたり、ヤマト政権の行政機構をつくるうえで大きな役割を果たした。また彼らは、鉄生産をはじめ土器(須恵器)生産・機織・金工などの進んだ技術を各地に伝え、ヤマト政権に貢献し、一部は支配機構に取りこまれた。

史料 倭王武の上表文(『宋書』倭国伝) 昔より祖禰躬ら甲冑を撰ぎ、山川を跋涉し、寧処に違あらず。東のかた毛人を征すること五十五国、西のかた衆夷を服すること六十六国、海を渡って北の方(朝鮮か)を平定すること九十五国になります。

口語訳 私の父祖は昔から自ら甲冑を身にまとい、山川を歩き回り、休む暇もありません。東は毛人(蝦夷か)を征服すること五十五国、西は衆夷(熊襲か)を服従させること六十六国、海を渡って北の方(朝鮮か)を平定すること九十五国になります。



1 元来は奈良盆地東南地域を指す「ヤマト」という地名には、いろいろな漢字があてられており、「大和」の表記が定着したのは奈良時代のことである。

2 古墳が盛んにつくられた3世紀なかごろから6世紀までを古墳時代とよぶ。

3 5世紀の古墳の副葬品では、鏡や玉などの呪術的性格のものは少なくなり、大陸系の鉄製の武器や、甲冑・馬具・金銅製の装身具などが増加している。このことは、華られた支配者が軍事的・政治的な性格を強めたことを示している。

4 朝鮮から伝わった技術で焼成された青灰色の土器。弥生土器など日本伝来の土器は土師器という(→p.23)。

史料 遣隋使の派遣（『隋書』倭国伝）

大業三年、其の王多利思比孤、使を遣はして朝貢す。其の国書に曰く、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや云」と。帝、之を覽て悦ばす。（原漢文）

口語訳 隋の大業三（六〇七）年、倭の王タラシヒコ（天皇・大王を指す）が使い（小野妹子）を派遣して隋に朝貢してきた。その国書には、「日が昇る処の天子が書を日が没する処の天子に送る。つつがなきや、云々」とあった。隋の煬帝はこれを見て不快の念を示した。

史料 憲法十七条（『日本書紀』）

一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふること無きを宗と為せ。…

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏・法・僧なり。…

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君は則ち天とし、臣は則ち地とす。…

十二に曰く、国司・国造、百姓を斂ること勿れ。…

十五に曰く、私に背きて公に向ふは、是れ臣の道なり。…

十七に曰く、夫れ事は独り断むべからず。必ず衆と宜しく論ふべし。（原漢文）

口語訳 一、和を大切にし、逆らうことのないよう心がけよ。二、三宝を熱心に崇拝せよ。三宝とは仏像・経典・僧侶のことである。

三、天皇の命令である詔を受けたら、必ずこれに服従せよ。君主こそ天であり、臣は地に相当する。

十二、国司や国造は百姓に重い税を課してはいけない。

十五、私心を捨て、公のためにつくることが、臣の義務である。

十七、物事は一人の判断で決めてはいけない。必ず、多くの人々と話し合うべきである。



法隆寺 法隆寺の建物は、『日本書紀』では670年に焼失したとあるが、8世紀はじめまでに再建された。現在の法隆寺は再建ではあるが、飛鳥様式を残し、金堂・塔・中門および回廊の一部は、世界最古の木造建造物である。塔と金堂を左右にならべる伽藍配置は法隆寺式とよばれる。



法隆寺釈迦三尊像 623年に厩戸皇子の妃や王子が皇子の冥福を祈ってつくられたといわれる鞍作鳥（止利仏師、?~?）の作。



広隆寺半跏思惟像 広隆寺は厩戸皇子から授けられた仏像を安置するために、秦氏によって622年に建立されたという。この仏像の材質は朝鮮のアカマツといわれる。

制をととのえた。厩戸は**冠位十二階**を定めて豪族らを序列化し、**憲法十七条**を定めて官吏に訓戒をあたえたとされている。

607年、厩戸は**小野妹子**を隋に派遣した（遣隋使）。隋の**煬帝**は会見した妹子に対し、「無礼な国書だ」と立腹したが、高句麗との戦争を優位にするため、翌608年に使節裴世清をヤマト政権に送り、外交関係を開いた。さらに同年、妹子は**高向玄理**・**南淵請安**・**僧旻**ら渡来系氏族出身の留学生を隋に同行した。彼らは20年あまりにわたって中国大陸に滞在して新知識を吸収するとともに、のちの孝徳朝の政治改革に貢献した。（→p.28）

飛鳥文化

6世紀後半から7世紀はじめには、ヤマト政権の大王の宮がおかれた飛鳥地方を舞台にした仏教文化が栄えた。この時期の文化を**飛鳥文化**とよぶ。

まず、仏教寺院は、建造物の造営や信仰の対象としての仏像を造立する作業を通して、古墳にかわり氏族集団をまとめるはたらきをもった。この時期の建築物遺構としては、**蘇我馬子**と厩戸皇子が造営した**飛鳥寺**（法興寺）、**斑鳩寺**（焼失前の**法隆寺**）、**四天王寺**がある。また仏像は、**法隆寺**の**金堂釈迦三尊像**、**夢殿救世観音像**、**百済観音像**に加えて、**中宮寺半跏思惟像**が代表的である。中宮寺半跏思惟像と共通の様式をもつ京都の**広隆寺半跏思惟像**は朝鮮半島からの渡来仏とされている。工芸品としては、**法隆寺**の**玉虫厨子**や**中宮寺天寿国繡帳**などがある。また、7世紀のはじめ、百済の僧**観勒**が**曆法**や**地理**の書を、高句麗の僧**曇徴**が**絵の具**・**紙**・**墨**の製法を日本に伝えたといわれる。

7 飛鳥時代の社会と文化の特色は何か

仏教の伝来

5世紀ころの朝鮮半島では諸国の争いがいっそうはげしくなった。高句麗の南下に圧迫された百済と新羅は、倭国と友好関係にあった**伽耶**諸国を560年代に併呑した。

そこで倭国は、百済に接近して**儒教**・**医学**・**易**・**暦**などの博士の派遣を求め、技術者・文物の導入をはかった。6世紀半ばには、百済の**聖明王**により、先進文化を象徴する**仏教**が公式に倭国に伝えられたといわれる（**仏教公伝**）。**聖明王**は、仏像・経典・仏具だけでなく、寺院の造営などのさまざまな技術をもった人々も倭国に派遣し、友好を深めた。

これにともない、ヤマト政権内部で実権をにぎりつつあった**蘇我氏**は、有力渡来系氏族と連携し、仏教の普及に力をそそいだ。ヤマト政権の統治を維持・拡大していくために、新たな技術や知識をもつ渡来系氏族との連携や、連携の核となる**仏教**が欠かせなかったからである。

東アジアの動向と推古朝の政治

百済とヤマト政権の交流が深まる間に、中国大陸では、南北朝の分裂を克服して、**隋**が589年に中国を統一した。隋は皇帝を頂点にいただき、**律**・**令**という統治法を基本にすえた中央集権国家であった。隋帝国は高句麗にくり返し征服戦争をしかけ、東アジア世界に影響をあたえた。

倭国では、『日本書紀』によれば、592年、**蘇我氏**が**崇峻天皇**を暗殺し、次の**推古天皇**のもとで、実質的には**蘇我馬子**と、その血縁であり大王家側の代表としてもふさわしかった**厩戸皇子**が**摂政**として共同統治する体

「聖徳太子」とその時代の実像

「聖徳太子」は実在したか

かつて1万円札の肖像にもなっていた「聖徳太子」だが、近年『日本書紀』をはじめ、法隆寺や四天王寺の僧侶が後世につくり出した文献をも素材にして、その実像にせまる研究が進んでいる。『書紀』には、厩戸皇子（厩戸王）という蘇我氏系の王族が、厩で生まれ皇太子となって政治を司り、推古女帝の摂政としてさまざまな業績をあげたと記されている。長い間、この人物こそが聖徳太子であるとされ、飢えた人を救済するなど慈愛に満ちた太子像に対する仏教的な信仰さえも生まれてきた。しかし、『書紀』に記された「皇子」や「摂政」の称号は当時から使われていたとは考えにくく、憲法十七条や冠位十二階の制定、遣隋使の派遣も、厩戸皇子個人の事績とは断定できないという。今や、厩戸皇子と「聖徳太子」とは別人という説や、太子は『書紀』の編纂時に律令国家の統治を正当化するために理想的な君主像を必要とした政権が生み出した架空の聖人だという説すらある。

とくに、「聖徳太子」の事績に関する多くの文献（『聖徳太子伝暦』、『四天王寺御手印縁起』）は、10世紀末から11世紀に編纂されたものであることが明らかになっている。それらは太子にゆかりをもつ寺院の僧侶たちが太子を顕彰するためにつくり上げた述作であった。律令国家が崩壊し、寺社への国家的給付が衰えたため、生き残りをかけて太子との関連を利用し、参詣者を増やそうとしたと考えられる。このように、厩戸皇子、あるいは「聖徳太子」の実像には、今後の研究にゆだねるべき多くの疑問が提起されている。



▲「聖徳太子」が描かれた旧1万円札 この画像は長く「聖徳太子像」として人々に親しまれてきた肖像画をもとにしているが、その肖像画も太子とする確かな根拠はなく、別人とする説もある。

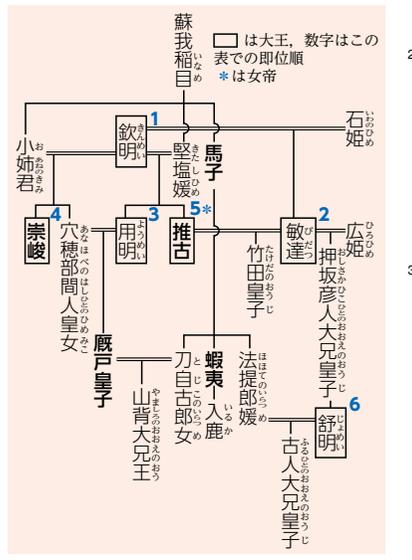
推古女帝の即位と政治

「聖徳太子」という人物を見直すことは、当時の政治や権力構造の実態をとらえることにもつながる。ここでは、太子が摂政として支えたという推古女帝の即位をめぐる事情や政治についてみてみよう。

推古女帝が大王の位につく直前、王権をしのぐ土地と人民を支配していた蘇我馬子が、大王・崇峻を暗殺した。この王権の危機的状況下では、大王家の一族で、蘇我氏にもゆかりをもつ推古しか王位を継承できる人物はいなかった。

『書紀』によれば、推古は、蘇我馬子や厩戸皇子と共同統治したという。当面、大王家の姻族として王権をしのぐ権勢をもつ蘇我氏（馬子一蝦夷）からの強い圧力をやわらげ、将来の王位継承を安定させるためには、甥にあたる厩戸皇子との共同統治を実現させなければならなかった。古代の王権では王権を支える豪族＝群臣の提議する政治案件を大王が有力者や王位継承予定者との合議で決定するのが常例であったから、共同統治は当然の結果であったともいえる。

ただし、推古は形ばかりの大王ではなかった。推古は、朝鮮半島への派兵を決めたり、鞍作鳥への叙任を定めたりといった政治力を備えていた。また、「聖徳太子」の死後、大王家の直轄地の割譲を求めた馬子の要求を拒否するなど、まさに政治権力の中心であったことも忘れてはならない。



▲大王家・蘇我氏系図

女性の歴史 1 出土資料にみる先史時代の女性

土偶の役割と女性

縄文時代・弥生時代の人物をかたどった造形品や人物を描いた絵画には、男女の差が表現されている場合がある。

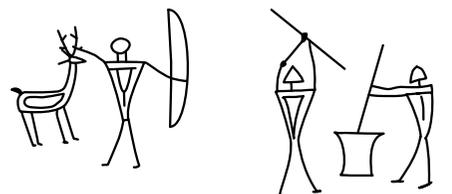
例えば縄文時代の土偶は、その多くが成熟した女性をかたどっている。土偶はおよそ1万3000年前、縄文時代の初期に登場するが、顔や手足はないのに、大きな乳房をあらわしている。縄文時代中期になると、妊娠した姿の土偶もたくさんつくられた。当時の人々にとってもっとも重要な身体の部分が誇張して表現されたのであるとすれば、土偶は安産や多産、子どもが無事育つことを祈願した信仰にかかわるものと考えるのが適切であろう。

縄文時代には、男性をかたどった土偶はほとんどない。そのかわり、石棒とよんでいる男性器を模した石製品によって、男性を象徴的に表現した。これも信仰にかかわる道具と考えられている。

縄文時代のなりわいは、おもに女性が木の実や貝を採集するのに対して、おもに男性が狩りや漁労をおこなうという、性別の分業を基本としていた。実生活での男女の区分が信仰にも反映し、男女で異なる信仰の対象物を生み出したのではないだろうか。

銅鐸絵画の男女

弥生時代には、銅鐸という青銅器がつけられた。一種の釣鐘であり、中につり下げた棒で打ち鳴らして音を発した。絵を描いた銅鐸が知られているが、そこに描かれているのは稲を収めたとされる高床倉庫、臼と杵で脱穀している風景など、稲作にかかわる情景



▲銅鐸絵画 弥生時代中期、およそ2000年前の銅鐸に描かれたもの。狩猟をする男性を○頭（左）、脱穀をする女性を△頭で描き分けている。

女性をかたどった最古級の土偶 縄文時代草創期、およそ1万3000年前のもの。ふくらんだ乳房を強調している。（滋賀県、相谷熊原遺跡出土、滋賀県教育委員会提供）



であり、銅鐸は稲作儀礼に用いたと考えられている。

銅鐸の絵画には人物も多い。兵庫

県桜ヶ丘神岡遺跡や香川県から出土したとされる銅鐸では、脱穀をしている人物の頭は三角で、弓をもった人物の頭は丸で描かれている。世界の非文明社会における男女の仕事の役割分担を調べた結果によると、食料の調理は女性の仕事である傾向が強く、狩猟は男性の仕事である傾向が強い。これらの銅鐸の人物は、頭の形によって、男女が描き分けられていた可能性が高い。弥生時代にも、性別の分業が引き継がれていたことがわかる。

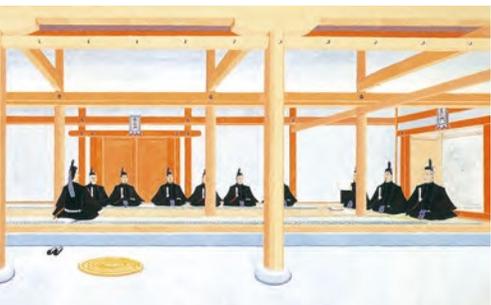
男女一对の偶像

3世紀の日本列島のことを記した魏志倭人伝には、女性は髪の毛を折りたたんでいたとされている。銅鐸の女性の頭を三角形で表現したのは、髪の毛の形を男女の識別の目印として意識したからかもしれない。弥生時代の女性をかたどった土偶形容器の頭が三角形をしているのも、髪形の表現と考えられる。

弥生時代にも土偶がいくつか知られているが、男女一对でつくられたのが縄文時代の土偶との違いである。木や石でつくった偶像にも男女像があらわれた。農耕は男女の共同作業である。銅鐸絵画でみたように、弥生時代に縄文時代の男女の役割分担が引き継がれている一方、農耕文化の形成によって、弥生時代の男女の表現に変化が訪れていることも見逃すわけにはいかない。縄文時代から弥生時代への変化は採集狩猟社会から農耕社会への変化であり、男女一对の偶像の出現は、それに対応した現象と理解できるからである。



▲男女一对の土偶形容器 弥生時代中期、およそ2200年前のもの。大きい方が男性像で小さい方が女性像である。焼いた小児の骨を納めた容器。（山梨県、岡遺跡出土、山梨県立考古博物館蔵）



陣定の想像図 陣定とは、内裏の左・右近衛陣に公卿が着座しておこなわれた国政の審議をいい、紫宸殿の東にある左近衛陣がおもに用いられた。(京都大学文学部博物館【現在の京都大学総合博物館】編『公家と儀式』より)



『御堂関白記』藤原道長の日記で、具注暦という暦の余白に、自筆で一日の記事を書いている。2013年、文書など歴史的価値の高い記録物の保全・公開を目的とするユネスコの『世界の記憶』として登録された。(陽明文庫蔵)

- ▶1 基経の正式な関白就任は、887(仁和3)年。
- ▶2 後世、この時代は「延喜・天曆の治」として理想化されたが、律令制再建のための一連の改革が成功したわけでもなく、地方の支配体制が大きく転換していく時期であった。
- ▶3 藤原道長の『御堂関白記』、右大臣を務めた藤原実資(957~1046)の『小右記』などがある。

今日、女御藤原威子を以て皇后に立つるの日なり。…太閤下官を招き呼びて云く、「和歌を読まむと欲す、必ず和すべし」者。答へて云く、「何ぞ和し奉らざらむ」と。又云く。「誇たる歌になむ有る。但し宿構にあらず」者。「此世をば我世とぞ思ふ望月の虧たる事も無と思へば」

史料 **藤原道長の栄華** (小右記 寛仁二年十月十六日条)

14 摂関時代の政治はどのように推移したのか

藤原北家の台頭

藤原北家の冬嗣の子**良房**は、**承和の変**(842年)などで権力をにぎり、858年に良房の外孫、**清和天皇**が幼少で即位した。866年、平安宮朝堂院の正門応天門が放火され焼失する事件がおこった。事件の首謀者として**伴善男**とその子**中庸**が配流される(応天門の変)が、この事件が進展するなかで、良房は「天下の政を摂行せよ」という清和天皇の勅を得て臣下で最初の**摂政**となり、**天皇大権**を代行することが確認された。さらに良房の養子**基経**は、**光孝天皇**即位にともない天皇の政務を補佐する**関白**に就任した。

10世紀に入り、醍醐・村上両天皇は摂政・関白をおかず親政をおこなった。しかし、醍醐天皇のとき、藤原時平と対立する菅原道真が大宰府へ左遷され、両天皇の間にあたる朱雀天皇の代には、藤原忠平が摂関に就任するなど、藤原氏の権力掌握と天皇との結びつきはいつそう進んだ。

969年、左大臣**源高明**が婿の**為平親王**を皇位につけようとしたとして謀反の疑いをかけられ、大宰権帥に左遷される事件がおこった(安和の変)。この事件は、有力な皇位継承者であった**為平親王**の後ろ盾である高明を中央政界から追放しようとする、藤原氏による陰謀とされる。

安和の変以後は、摂政・関白が常置されるようになり、藤原氏のなかでも藤原北家から摂政・関白が次々に就任した。摂政・関白を出す家柄は、のちに**摂関家**とよばれるようになった。

摂関政治

藤原道長は、藤原北家一族による摂政・関白の地位をめぐる争いに勝利を収め、4人の娘を次々と皇后や皇太子妃とし、30年間にわたり国政の中心で権勢をふるった。その子**藤原頼通**も、およそ半世紀間、3代の天皇の摂政や関白として大



道真のあたり 930年に内裏に雷が落ち、道真の左遷に協力した貴族が死亡した。これは道真のあたりと恐れられた。(「北野天神縁起絵巻」, 模写)

きな権力を維持した。このように摂政・関白を中心に国政が運営され、その一族が主要な官職を独占した10世紀後半から11世紀ころまでを**摂関時代**という。

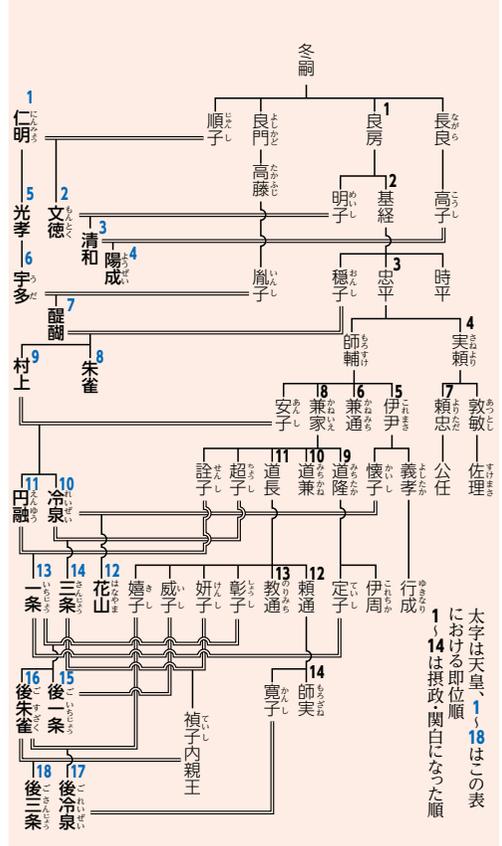
摂関時代でも、国政は従来どおり**太政官**を中心におこなわれたが、政務は先例や儀式を重視した。そこで、先例を記録しそれを子孫に伝えるため、貴族は盛んに日記を書き記した。また、儀式の作法や次第を記し、先例も収めた儀式書もこの時期に編纂された。

国司と地方政治

摂関時代のころには、地方政治も大きく転換した。農民層から「富豪の輩」とよばれた有力農民があらわれる一方、没落した農民の浮浪・逃亡もくり返され、戸籍・計帳による農民の把握がますます難しくなり、班田収授もしだいに実施されなくなった。

こうした状況に対し、諸国の**国司**は、課税の単位を人間から土地へと転換し、**租**、**雑徭**、**出挙**などから、**官物**と**臨時雑役**を中心とした体系に変化した。そうして、中央政府への一定額の租税納入を国司に請け負わせることで、国司に国内支配の全権をまかせる体制へと転換していった。

また、諸国の**公領**(**国衙領**)はしだいに国司の私領に近いものとなり、官職としての国司は、中流以下の貴族にとって利権の多い魅力あるものになっていった。さらに国司に任命されても、任地に赴任せず、**目代**国衙(留守所)へ派遣して国務を処理させる**遷任**の制度が公認されると、上級貴族にとっても国司が利権的な職となった。一方、任国に赴いた**受領**国司の多くは、あらゆる手段で**私腹**を肥やそうとしたため、在地の郡司や有力農民たちと対立し、たびたび紛争をおこした。



皇室と藤原氏の関係系図(2)

- ▶4 源高明の『西宮記』、藤原公任(966~1041)の『北山抄』などがある。
- ▶5 こうした状況の変化の背景には、負名体制の成立という実態があった(→p.48)。また、尾張国(愛知県)の国司藤原元命のように、その暴政を郡司・百姓から太政官に訴えられ、解任された例もあった。
- ▶6 律令制のもとの租・調・庸などの税目や、出挙の正税などの系譜を引いた国家が徴収した税目。
- ▶7 律令制のもとの雑徭や、交易雑物などの系統を引いた税目。
- ▶8 都では朝廷の儀式や造営事業などの費用を負担して、国司などの官職につけてもらう**成功**や再任してもらう**重任**がおこなわれた。



任国へ下向する受領の一行 因幡国(鳥取県)に赴く国司橋行平の一行。(「因幡堂業師縁起絵巻」, 東京国立博物館蔵)



10世紀ころの東アジア

仮名文字の発達

アイウエオカキ	いろはにほへと
阿伊宇江於加幾	以呂波仁保部止
戸イウエ於カ	以呂波仁保部止
アウオ	いろはにほへと



寝殿造 藤原氏の東三条殿の復元模型。正殿（寝殿①）を中心に、南庭②をとり囲むように、対屋③、渡殿④、中門廊⑤などが建てられる。⑥は釣殿。寝殿造の遺構は現存していない。（国立歴史民俗博物館蔵）



阿彌陀如来像 寄木造で、定朝の作。高さ279cm。（平等院蔵）



平等院鳳凰堂 内陣に阿彌陀如来像が安置され、壁や扉には大和絵の来迎図が描かれ、「極楽いぶかしくは宇治の御寺を礼へ」といわれた。（京都府宇治市）

空也 空也が南無阿彌陀仏と称える。その一音一音が阿彌陀仏になったという伝説にもとづく木造彫刻。鎌倉時代中期の康勝作。高さ117.5cm。（京都市、六波羅蜜寺蔵）



15 摂関時代の文化の特色は何か

東アジアの動乱と民族文化の勃興

10世紀、東アジアの政治地図は大きくぬりかわった。かつて日本と国交のあった唐（907年）・渤海（926年）・新羅（935年）があいついで滅び、それにかわって、中国大陸の北部では契丹（遼）が、南部では宋が、朝鮮半島では高麗が登場した。

唐の衰えを伝え聞いた日本の朝廷は、遣唐大使に予定された菅原道真の建議により、とりあえず894年の遣唐使派遣を中止した。貴族たちの欲する唐物は来航する中国商人から入手できたこともあって、その後、遣唐使の派遣は計画されなかった。

10世紀以降の東アジアでは、それまでの中国文化の模倣から脱して、各民族の個性にあった文化へとつくりかえていこうとするうごきが生まれた。文字文化の面でそれは著しく、契丹、西夏（タンゲート）、女真などで、漢字をもとに独自の文字が考案された。日本でも、9世紀に表音文字として、漢字の草書体をもとにした平仮名、漢字の一部をとった片仮名が生まれ、10世紀にその使用が定着した。

仮名の創造と国風文化

仮名によって日本語の語法に即したより自由な表現が可能となり、現代まで続く平仮名を主体に漢字を交えた文体が発達した。作品としては、『竹取物語』、『伊勢物語』などに続いて、『源氏物語』や『清少納言の随筆』『枕草子』が書かれた。詩のジャンルでも、和歌が漢詩とならんでもてはやされるようになり、

905年には、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が紀貫之らによって編集された。ただし、貫之の紀行文『土佐日記』が女性を装って書かれているように、仮名を私的なもの、また女性が使うものとする意識が続き、江戸時代にいたっても仮名は公的な文章に使われることはなかった。

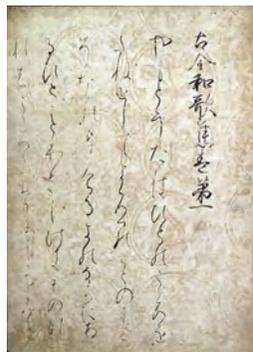
文学のほかにも、寝殿造とよばれる住宅様式が発達し、日本の風物を描く大和絵が興隆し、平仮名主体の流麗な書体が和歌の流行とあいまって完成した。また貴族の服装も中国風を脱して、男子は束帯、女子はのちに十二単とよばれる女房装束が正装とされた。これらの洗練された貴族文化を国風文化、または藤原文化という。

浄土思想の浸透

摂関時代の仏教界では、引き続き天台・真言両宗が主として貴族層から支持を得ていた。しかし、高まる社会不安を背景に、穢れた現世をのがれて阿彌陀浄土への往生を願う浄土教の信仰が、1052年から末法の世に入るとする末法思想とあいまって、急速に広まった。985年には、源信（恵心僧都）によって極楽往生の方法を論じた『往生要集』が著され、また、慶滋保胤の『日本往生極楽記』を筆頭に、南無阿彌陀仏と称える念仏の功德によって往生した人々の伝記を集めた往生伝が多く書かれた。藤原頼通が建立した宇治の平等院鳳凰堂をはじめ、各地に阿彌陀堂が建立され、定朝らの仏師集団が寄木造の手法で多くの阿彌陀如来像を製作した。仏画では、現世に來臨する阿彌陀仏の姿を描く来迎図が多く描かれた。

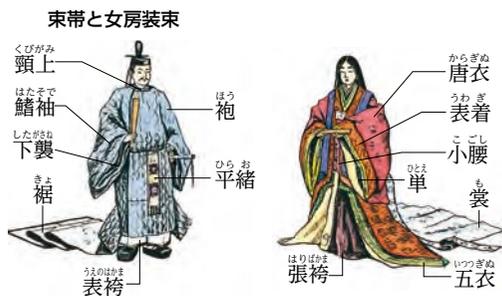
また摂関期には、都で念仏をすすめ市聖とよばれた空也らの活動によって、浄土教は民衆にまで浸透していった。また在来の神と外来の仏を結びつける考えが広まって、仏を本体とし、神をその仮の姿とする本地垂迹説が発展していった。

宮廷社会の男女関係を描いた長編小説で、全54帖。日本文学の最高傑作としてのちのちまで大きな影響をあたえた。小野道風(894~966)・藤原佐理(944~998)・藤原行成(972~1027)の3名手を、唐風の三筆(→p.39)と対比して三蹟という。釈迦没後、正法千年・像法千年を経て、仏法が衰え国が乱れる末法の世に入るとする歴史観。地方の動揺や戦乱・災害の続発などによる社会不安を背景に流行した。天照大神を大日如来の化身とするなど、神の本体(本地)は仏で、仏は神の姿を借りて地上に出現する(垂迹)という考え方。



『古今和歌集』の仮名序序文は漢字で書かれたもの(真名序)と仮名で書かれたもの(仮名序)の2種類がある。仮名に対して漢字は「真名」とよばれた。仮名序は紀貫之が述作した。

こののち、日本の貴族層は、中国とは対等に、高麗・朝鮮王朝には優位に立つというたてまえを保ちながら、外国との国交を結ばないことを伝統的な外交方針とするようになる。



仏像からみる古代史

仏像は、仏教が社会や人々とかかわるなかで無数につくられて日本の社会に定着し、現在、信仰や鑑賞の対象として大切にされている。古代社会では、仏像はどのようにしてつくられ、どのような社会的役割をもっていたのだろうか。

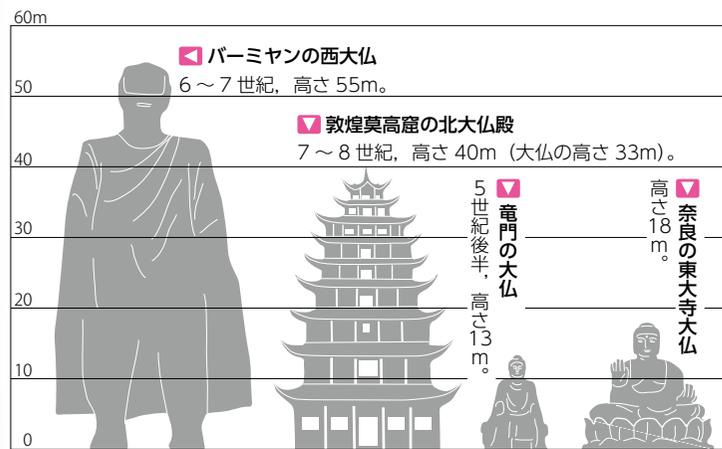
》 仏像の出現と役割

もともと、釈迦が説いた教義には仏像・仏画などの図像を拜む行為（偶像崇拜）はない。仏教は、インドを源としながら、中央アジアから中国大陸・朝鮮半島・日本列島へ、あるいは東南アジアへ伝来する過程で、それぞれの地域の土着信仰のならわしを取り入れて変容した。そのなかで、仏像は祈りをささげる具体的な対象としてつくられていった。

例えば、アフガニスタンのパーミヤンの東西大仏（2001年にイスラム過激派タリバンによって破壊された）は、現地の政権の権力を誇示する道具としてつくられた。また、北魏の孝文帝は現実の皇帝の姿を大仏として刻んだとされる。さらに唐の第3代皇帝高宗やその妻則天武后は、龍門や敦煌に大仏を造営することでその権威を目にみえるかたちにした。

》 「大仏造立」のグローバルヒストリー

日本列島には、朝鮮半島を経て仏像がもたらされたが、その際には、個人の信仰の対象やせいぜい仏教を信仰する氏族をまとめるためのものとしてつくられたので、小規模なものであったと考えられる。しかし、



当時の先進国であった唐と接触し、仏教を崇敬する王の国は平和が保たれるという鎮護国家の考え方が入ってくると、聖武天皇や光明皇后は、中国風の統治の実現をめざして多くの民衆の力を結集する「まつりごと」の核としての「毘盧舎那大仏」（ヴァイローチャナ：宇宙の中心を象徴する）の造立事業に乗り出した。そのモデルには、玄奘三蔵の著した『大唐西域記』を下敷きにして、遠く中央アジアの「流砂」のなかで金色に輝くパーミヤンの大仏が想定されていたという。「大仏造立」のグローバルな広がり指摘できるであろう。

》 仏像のつくり方

パーミヤン大仏は、断崖の岩石を彫刻したものであり、東大寺大仏は、青銅を型に流して鑄造したものである。仏像にはその素材やつくり方によって木像・塑像・石像・乾漆像・銅像・鉄像などがある。

①木像（寄木造） 仏像をいくつかのパーツに分けて木材でつくり、これらを組み合わせて完成する。平安時代に生じた阿彌陀仏像の大量需要を背景に開発された技法。これにより工房で能率的に部材の制作・組み立てができるようになった。（平等院阿彌陀如来像など）

②塑像 木を芯にして粘土を固めてつくる。（東大寺戒壇院四天王像など）

③乾漆像 木や粘土の原型に麻布を貼り、漆で仕上げ。脱活乾漆像の「脱活」とは内部が空洞の意。（東大寺不空罽索観音像など）

④銅像 塑像にあわせて土で外型をつくり、外型と塑像の間に銅を流し込む。（東大寺大仏など）

》 東アジアの「国風文化」

東アジア世界のなかで、唐の存在は周辺の民族や国家の文化に影響をあたえてきた。例えば、漢字を用いた外交文書の作成や、律令などの統治技術や仏教・儒教の摂取、衣食住の唐風化などをあげることができる。しかし、8世紀後半から長く続いた唐の国内の混乱や衰えは周辺の民族に民族意識を高める機会をあたえた。その一例が独自の文字の創出である。

9世紀の日本では、漢字をもとにした平仮名・片仮名が工夫され、10世紀には定着した。『古今和歌集』（905〔延喜5〕年成立）の「仮名序」がいうように、漢文の用法にしばられることなく「心におもふことを見るものきくものにつけていひいだせる」ようになったのである。このような状況は日本に限らない。契丹文字・西夏文字・女真文字など、漢字をもとにしながら各民族の意思疎通にふさわしい文字が次々に生み出された。

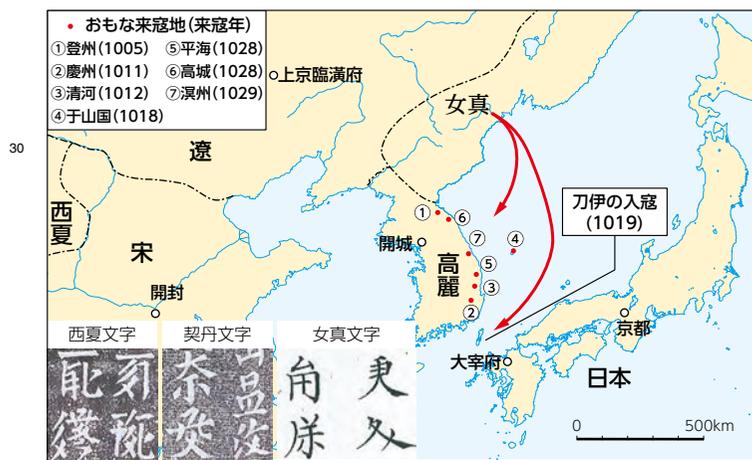
ところで、838（承和5）年を最後に遣唐使が派遣されなくなったのは、中国系商人たちの海洋貿易活動が活発化したため、貴族層が欲しかった陶磁器・書籍などの唐物はほぼ入手することができたという社会経済状況が影響している。したがって、国風文化については、遣唐使の中断によって東アジア世界と断絶した結果としてではなく、むしろ東アジア世界全体の動向と関連づけて考える必要がある。

》 「刀伊の入寇」を見直す

このように、東アジア情勢をながめてみると、これまで突発的にとらえられてきた事件も、東アジアの転換と結びつけて理解することができる。その例が「刀伊の入寇」である。これは、高麗で「東女真」とよばれた、沿海州沿岸に居住する女真族の一部が、1019（寛仁3）年に朝鮮半島東海岸から対馬・壹岐・九州北部へ上陸し、住民や家畜類の殺害、財物の奪取、拉致などをおこなった事件で、その被害は甚大だった。

従来、この事件は、日本史のなかでは単発的・偶発的なできごととして扱われ、摂関政治期の国防・軍事に関する政策の欠落や、外敵を撃退した地方武士の勃興が指摘されてきた。ところが最近、東アジアや北東アジアの歴史研究が進んだことにより、次のような歴史像・事件像への転換が必要となっている。

唐の滅亡（907年）後の混乱や、渤海を滅ぼした契丹の動向に左右されて、当時の北東アジアでは安定した統一政権が形成されにくい状況が続いていた。一方、渤海の支配下にあった女真族は、渤海の外交使節に同行するなどしてその交易をおこなっていたが、渤海滅亡（926年）後はこうしたルートがつかれなくなった。そのため、10世紀後半～11世紀にかけての朝鮮半島の東側海域では、女真族が高麗王朝に対して「貢物を納めて投擲・来投」する一方、交易がうまくいかない場合は海賊行為に転じるようになった。「刀伊の入寇」の前後には、左の地図のような女真の来寇が確認される。



こうしてみると、「刀伊の入寇」とは、東アジアの変動期におきた女真族の通商・交易欲求の波動の一部が、日本列島におよんできたものととらえることができる。

■ 諸国の文字と女真の来寇 女真の来寇は『高麗史』などに記録されたもの。記録に残っていない来寇も多いと考えられる。

第2編 中世

中世の日本と世界

● モンゴルの登場

1126年、女真族の金は中国北部を奪い、宋は南部に移って南宋となった。同年、金は高麗をも服属させている。武力をもつ者が時代の主役に躍り出て、東アジアでは12世紀末になると高麗で武人政権、日本で鎌倉幕府が登場する。

1206年、チンギス・ハンが即位して以降、モンゴル帝国は驚異的な速さでユーラシア全体に領土を広げ、その兵力の先端は、東は樺太から琉球列島、西はヨーロッパ中部、南はジャワ島にまで達した。これによってユーラシア全体が結びつけられた。

モンゴル(元)は、東アジアでは金を滅ぼし、高麗を従属させ、ついに1279年、南宋を滅ぼして中国全土を呑みこんだ。日本は一過的に攻められたただけだったが、アジアの多くの国が滅ぼされたり、従属的な関係のもとにおかれたりした。

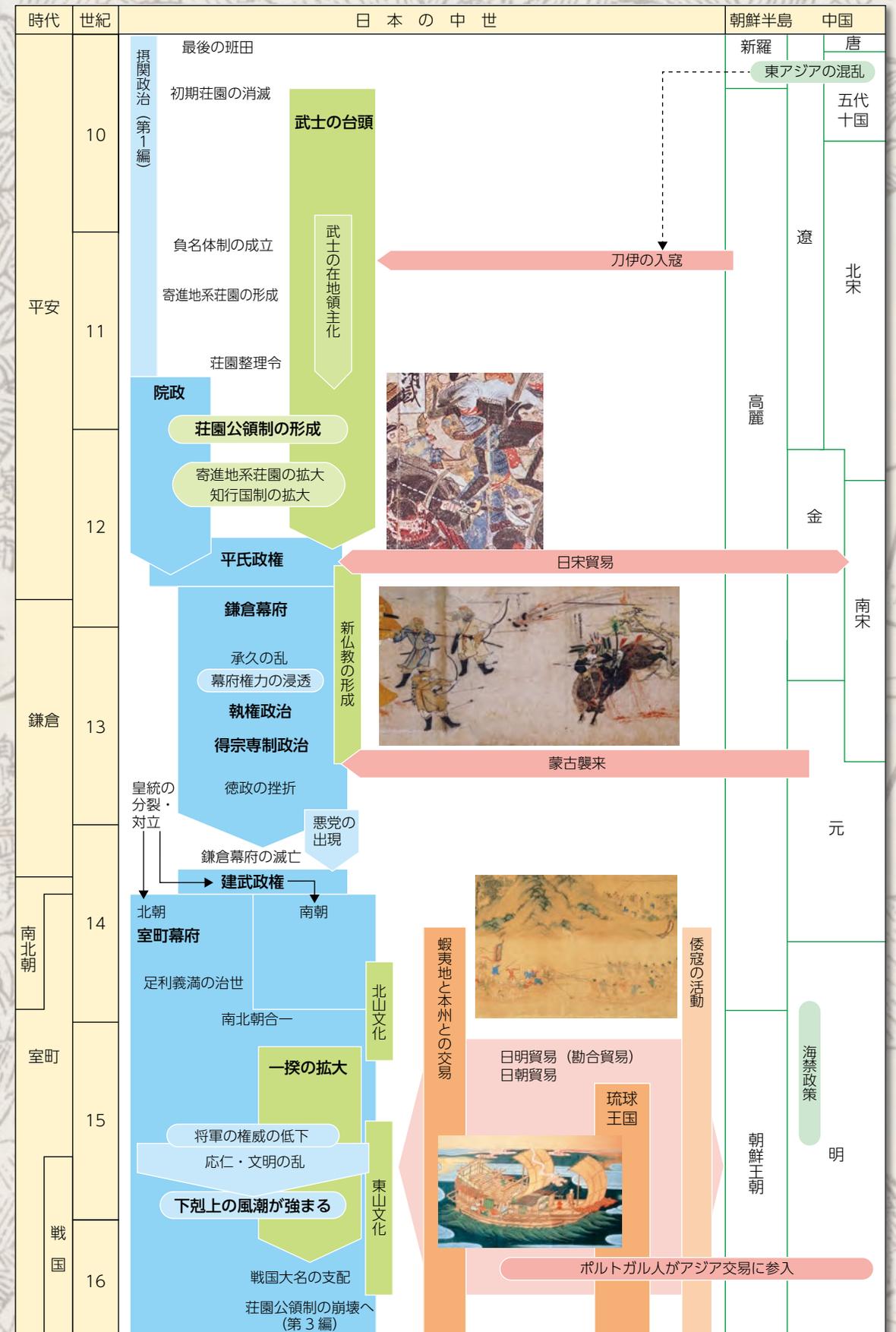
● 東アジア海域の発展

一方、宋～元代、東アジアから東南アジアにかけての海域では、民間商人が主導する貿易船の往来が盛んで、国際関係の基底は政治を中心としたものから交易など経済を中心としたものへと移りつつあった。日元間の貿易も、戦争の後にもかかわらず、14世紀前半に最盛期をむかえた。

1368年、朱元璋は明を建国し、元を北へ追いやった。明は14世紀半ばから盛んになった倭寇を警戒し、民間人の海外渡航を厳禁する海禁政策をとったので、諸外国との合法的な往来は外交使節に限られた。そこで中国商人は、東南アジア・東アジアの各地に移住して、対中国貿易を、国家使節というかたちでない、マラッカ・パレンバン・琉球などの港市国家が繁栄した。

その一方で、多民族化した倭寇が中国沿海部の勢力と結んで密貿易を展開し、海禁を空文化していった。1526年に石見銀山が開かれてのち、日本から搬出されるおもな物資は銀となった。

15世紀末、スペインは「新大陸」、ポルトガルはインドに到達し、両国は全地球の管轄権を山分けした。そのうち、ポルトガルはマラッカを占領、さらに東方へ進出して倭寇集団に加わり、明からマカオ居留を許された。スペインは西回りでフィリピンに到達し、マニラを建設した。こうして地球規模の「世界史」が生まれることとなった。





フビライ



モンゴルの襲来 左側の3人は元の兵士であるが、後世の描き加えとの説もある。中央には「てつはう」とよばれる元軍の火器。右には火器におどろく竹崎季長(1246~?)と馬。肥後国(熊本県)の御家人季長は、文永の役で戦功をあげ、弘安の役でも人があきれほどの勇猛ぶりをみせた。1293(永仁元)年ころ、季長は2度の合戦での戦いぶりを絵巻物に描かせた。モンゴルとの戦争を同時代人の眼でとらえた絵巻資料として、世界に例をみない。〔蒙古襲来絵詞〕、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)

23 モンゴル(元)はなぜ日本を攻め取れなかったのか

ユーラシアの嵐

13世紀のはじめ、モンゴル高原にチンギスハーンが出て、遊牧を生業とするモンゴル諸部族を統一すると、彼の孫の世代までに、モンゴルは西域の西夏、華北の金、西

アジアのアッパース朝などを滅ぼし、一時は東ヨーロッパまでおびやかした。この大帝を構成する国家群は、土地よりは人間中心の機動性に富む軍事権力であった。チンギスの孫フビライは、帝国の東部を領有して中国王朝の性格を強め、1271年には国号を元と定めた。

モンゴル軍は1231年から朝鮮半島の高麗に侵略を開始した。当時高麗で実権をにぎっていた武人政権は、翌年都を開京から江華島に移して抵抗を続けたが、1260年にいたって従属的な講和を強いられた。1270年、三別抄という武人政権の軍隊が反乱をおこし、海上を南へ移動しながら抗戦を続けたが、3年後に済州島で元・高麗連合軍に壊滅させられた。

1261年、フビライは南宋と戦端を開き、1276年に首都臨安(杭州)を陥落させた。元軍は東南アジアにも侵攻し、1287年にミャンマーのパガン朝を服属させたものの、翌年ヴェトナムで大敗を喫した。また1292年のジャワ征討も失敗に終わった。

文永・弘安の役

高麗を屈伏させて日本に目をつけたフビライは、1266年、日本に国交を求めた。高麗の引きのぼし工作があって、使者の到着は1268年のはじめになった。幕府は西国御家人にモンゴルへの備えを命ずるとともに、北条時宗を執権にすえて体制固めをはかった。その後2度にわたって使者が来日、朝廷は返答しようとしたが、幕府の反対でとりやめになった。モンゴルの脅威に対して、朝廷や寺社は神仏の力を引き出すための祈禱をおこない、幕府

▶1 12世紀の末、高麗で、文人の下位に甘んじていた武人勢力が、クーデタで権力をにぎった。これを平氏政権や鎌倉幕府と対比してみると興味深い。

▶2 この反乱はモンゴル軍の日本征討を遅らせた。三別抄は、1271年に日本に援軍と兵糧を求めたが、無視された。

▶3 元の軍事行動のおよんだ東端は、1264年から86年まで数次におよんだカラフトの骨鬼(アイヌ)征討である。これはアイヌの勢力拡大による隣接民族との争いに元が介入したもので、並行しておきた日本列島北部の蝦夷の反乱とも連動するうごきと考えられる。

▶4 幕府は、翌年を期して高麗へ遠征軍を送ることとし、九州の武士に動員令を發した。当時これを「異国征伐」と称した。だが石築地築造との両立は困難で、実行されなかった。

は九州の武士を動員して博多湾岸を防備する異国警固番役をはじめた。

5 1274年、元軍・高麗軍約2万8千は、対馬・壱岐を侵して北九州を攻めた。幕府は九州の御家人を動員してむかえ撃ったが、集団戦法と火薬の威力に圧倒され、苦戦を強いられた。

しかし、折からの暴風雨もあって、征討軍はあっさり撤退した(文永の役)。この戦役中、幕府は非御家人をも動員して防御にあたるよう西国の守護に命じた。これは幕府の支配権の大幅な拡張だったが、同時に幕府の果たすべき責任も重くなった。

幕府は、再度の戦争に備えて博多湾岸に石築地(元寇防壁)を築いた。この間南宋を滅ぼした元は、1281年、東路軍4万、江南軍10万の大軍を日本にさし向けた。しかしこの遠征も、御家人らの奮戦と石築地の効果、多民族からなる元軍の足並みの乱れ、大暴風雨によって、失敗に終わった。元軍の生還者は3万数千にすぎなかった(弘安の役)。

この2度にわたる対外戦争を蒙古襲来または元寇という。補給路ののびきった前線、不得意な海戦、しかも兵士の主力は闘志を欠いた南宋の降伏兵、という悪条件のもとでは、日本でも東南アジアでも、元軍の敗北はむしろ必然だった。

戦時体制の継続

弘安の役後も、元はくり返し日本征討を計画した。幕府も、異国警固番役や石築地の築造・修理を続け、非御家人の動員体制も解かなかった。第3次日本征討は、もとの南宋の地江南で反元蜂起がおきたり、インドシナ方面の戦況が泥沼化したりして、そのたびに挫折した。1292年、フビライはまたしても日本征討を決意し、日本にその旨を告げてきた。

翌年、幕府は北条兼時らに防戦の指揮を命じた。これが鎮西探題のはじまりである。日本征討自体は、1294年のフビライの死で立ち消えになったが、鎮西探題は裁判機能に重点を移しつつ、北条権力の九州支配を支える強力な機関として成長していく。



元軍の侵攻 弘安の役の東路軍は元軍と高麗軍、江南軍は元軍と旧南宋軍からなっていた。



石築地と武士 馬上の武士がこの絵詞を制作させた竹崎季長である(「蒙古襲来絵詞」、宮内庁三の丸尚蔵館蔵)。石築地は一部が福岡市の海岸に現存している。

▶5 この戦況を決定づけたのは、湖北省の要地襄陽が、1268年から6年間にもおよぶ包囲の末、モンゴルの手に落ちたことであった。

中世の村落生活を復元する

琵琶湖の北岸にへばりつくかのように、菅浦という小さな村がある。村人たちは、中世以来、1200通もの古文書を共有財産として大事に伝えてきた。中世の村に生きた人々の姿を知る貴重な資料として、国宝に指定されている（「菅浦文書」、滋賀大学経済学部附属史料館蔵）。そのなかに、1枚の美しい絵図がある。

菅浦絵図をじっくり見よう

絵図の上下左右の端に北・南・西・東の方位が明記され、上半分の右側に「大浦下庄」「菅浦」とあり、その間に引かれた朱線の脇に「菅浦与大浦下庄堺」とある。この絵図は、200年も続いた菅浦と隣村大浦との境界争いの過程でつくられた。朱線に沿って記される「山田峯」「谷尾」「神楊」や、菅浦側の「赤崎」「鉢伏山」「□□（津吹）」「羅尾崎」も、境界争いにかかわる地名だ。争いの焦点は、「日差」「諸河」という名の狭小な田地が、菅浦・大浦どちらのものか、にあった。

しかし、この絵図を見た人は、下半分に緑・茶・朱・薄緑などの色彩を駆使して描かれた島に、目を奪われないだろうか。これは、湖中の霊場として今にもぎわう竹生島で、東側の神社

▽「菅浦与大浦下庄堺絵図」(91.4×62.8cm)



▽ 絵図の裏書



（鳥居に注意）と西側の寺（楼門や塔・鐘楼が見える）から構成される。同じような描法が、上半分の左側、「大崎」「峯堂」の文字のうしろにも見られる。これらは境界争いとどのような関係があるのだろうか。

絵図はいつつくられたか

この絵図は、いつだれがつくったのか。裏の右上端に「乾元々年八月十七日」とある記載が、「乾元々年八月日」付けの「官使注進状案」という古文書に、「同八月十七日、彼の堺を実検し、絵図を注し言上する所なり」とあるのと符合する。そこで、乾元元年（1302年）に後宇多上皇の使者が作成し上皇に提出した絵図だと、長くみなされてきた。

1976年にいって、「絵図は境界争いが再燃



▽ 菅浦の景観（滋賀県長浜市）

した暦応年間（1338～41年）以降に、菅浦が作成した」という、新しい解釈が示された。そのおもな根拠は二つ。(1)裏書の年月日は絵図中の文字と筆跡が異なるうえ、8月は改元前でまだ乾元という年号は存在しなかった。これは年月日があとから加えられたことを示す。(2)官使注進状に「双方の主張の相違点を細かく絵図中に記した」とあるが、現存する絵図にはそうした記載がなく、もっぱら菅浦側の主張がもりこまれている。

✓ やってみよう

歴史探偵になって、裏書の年月日と絵図中の文字の筆跡鑑定に挑戦しよう。

村を守るたたかい

日差・諸河をめぐる争いは延々と続いた。文安2年（1445年）には、大浦側が境界の山への立ち入りを抑留したことから、菅浦側が鎌7丁を奪い、仕返しに大浦側が船を奪い、果ては双方が近隣の村々に助っ人を頼んで、血みどろの合戦に発展した。勝利した菅浦側は、文安6年に「惣庄」の名で一部始終を書き記し、「日差・諸河の置書」と名づけている。

双方はそれぞれ別の領主を頼って、幕府や朝廷に訴え出た。ほとんど唯一の田地だった日差・諸河を死守したい菅浦にとって、竹生島は自分たちの側に立つ宗教的権威だった。絵図が竹生島を巨大かつ精細に描いた動機はここにある。それゆえあの境界線は、菅浦を包みこむ竹生島と大浦との境界でもあった、とも考えられる。

「菅浦文書」は、中世民衆が勝ち取った惣村の自治のありさまを、生き生きと語ってくれる。し

史料 日差・諸河の置書
自今以後も若此公事出来候ハ、如此京都をもつくるい（幕府や朝廷にも働きかけて）、地下人もけなげにつをくもち候べく候。万一大浦へよする事候ハ、山口と上の山よりハかゝるべからず。勢ハ多候とも、船よせからとすのはまと、二手よせて敵方を一方へおいだすやうに仕候べく候。七八十の老共も弓矢を取、女性達も水をくみたててをかつぐ事なり。後も如此ふるまい候べく候。…

かしその自治は、同じ社会層の大浦の百姓たちから菅浦の利益を守り抜くためのもので、争いは近隣の村々からも死者が出るほど激烈だった。私たちは、民衆による高度な自治の達成を読み取ったうえで、殺伐としたシーンからも目を逸らしてはなるまい。

✓ やってみよう

「日差・諸河の置書」は、中世の民衆が著した歴史叙述ともいえる。文章を音読して、中世の村人の感情や行動を想像してみよう。

村落生活と宗教的世界

また絵図からは宗教色の濃さを感じられないだろうか。竹生島は、実際よりはるかに大きく、かつ菅浦に近く描かれる。その竹生島と西側の峰には、朱塗りの堂舎と濃い緑の木々が丹念に描きこまれ、菅浦の域内にも小さな堂舎が四つある。これらは境界争いと直接関係なさそうだが、神仏に守られた村落生活を描くには、欠かせない要素だった。

日本の中世は、中国文明圏にありながら、東アジアの他地域とは違って、故人の栄誉を顕彰する墓碑銘がほとんど見られない。人々は現世より来世での救済を願い、それゆえ故人のためにつくられる石造物の大半が、五輪塔・宝篋印塔・板碑などの供養塔となった。



その大多数には故人の名前すら刻まれていない。なんと不思議なことではないか。

▽ 中世の墓地（鹿児島県肝付町）



15世紀後半の関東の勢力分布 古河公方と堀越公方の対立に加え、上杉氏自体が家督争いをきっかけに扇谷家と山内家に分裂したことも戦乱の一因であった。



応仁・文明の乱 応仁・文明の乱では戦闘の形が大きく変わり、騎馬武者による一騎打ちから足軽を中心とする集団戦となった。また武器も、長槍・雑刀が主流となり、足軽などの歩兵人員が多いか少ないかによって、戦局が決まるようになった。右から攻めているのが細川軍、左が山名軍。(『真如堂縁起絵巻』)

32 戦国時代はどのようにしてはじまったのか

「万人恐怖の世」

5代將軍足利義量に後継がなく、6代將軍義教はくじ引きで決められたため、將軍としての權威の確立を望んだ。代始めの新政を印象づけるために、自ら裁判をおこなうこと(御前沙汰)を定め、將軍位を争った足利持氏の血筋を断ち、鎌倉公方に自分の子を任命する強硬策を立てた。1438年、室町幕府と鎌倉府の協調をはかってきた関東管領上杉憲実が持氏と対立すると、機会をねらっていた義教は大軍を派遣して、翌年持氏を自殺させた(永享の乱)。

このように、足利義教の治世は専制的で「万人恐怖の世」(後崇光院の言葉)と評された。しかし義教は、守護大名の家督決定にまで介入しようとして、1441年、播磨守護の赤松満祐の一族によって謀殺された(嘉吉の乱)。これをきっかけに將軍の權威は弱まっていった。

「戦国の世」へ

嘉吉の乱の直後、上杉憲実が幕府首脳にはたらきかけて足利持氏の子成氏を鎌倉公方にむかえた。しかし、その足利成氏は関東管領上杉憲忠(憲実の子)としだいに対立を深め、1454年、ついに上杉憲忠を謀殺した(享徳の乱)。成氏は、鎌倉を出て上杉勢を討伐する間に下総古河に居をかまえた(古河公方)。これに対抗して幕府は、1457年、足利義政の異母兄弟足利政知を東国に派遣した。しかし、政知は鎌倉に入れず、伊豆の堀越で一地域の領主とならざるを得なかった(堀越公方)。享徳の乱をきっかけに東国の武士は分裂し、成氏とその子孫と、上杉氏を中心とする勢力との間に30年以上も戦乱が続き、東国は他の地域に先がけて戦国の世に突入した。

さらに、政知没後の堀越公方家では、家督争いを制して足利茶々丸が家督をついだ。折しも京都では、1493年、管領の細川政元が足利義澄



北条早雲 幕府奉公衆伊勢氏の一族ともいわれる。(神奈川県、早雲寺蔵)

▶1 東国では、さらに持氏の遺児春王丸・安王丸を奉じて結城氏朝らが反乱をおこしたが、ふたたび鎮圧された(結城合戦)。

一、足軽という者は長く禁止されるべきである事。昔から世の中が乱れたことはあつたが、足軽という者については、古い記録の中にも記されていらない呼び名である。最近の都でも記されて初めて登場した足軽は、かつてないほどの悪党である。その理由は都の内外の神社・寺院、五山や十刹の禪寺、公家や門跡寺院(皇族が住んでいる由緒ある寺院)が荒れ果てたのは、みなこの足軽のしわざだからである。それにしても、まさに下剋上の世の中であることよ。

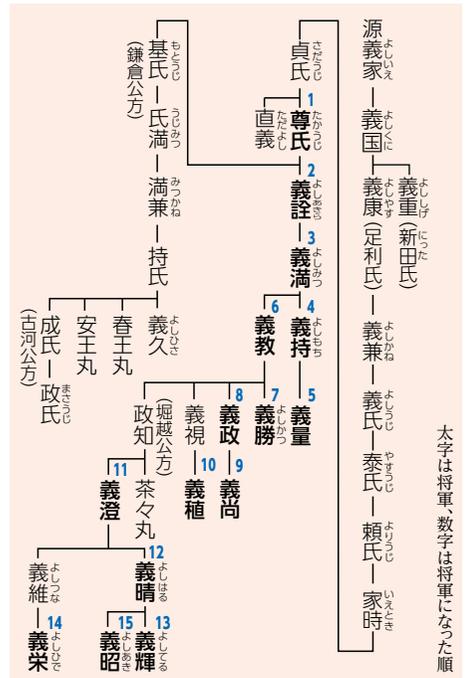
史料 **下剋上の世**(一条兼良「権談治要」)
一、足がるといふ者長く停止せらるべき事。昔より天下の乱るることは侍れど、足軽といふことは旧記などにもしるざる名目也。此たびはじめて出来たる足がるは、超過したる悪党なり。其故は洛中洛外の諸社・諸寺・五山十刹・公家門跡の滅亡はかれらが所行也。…さもこそ下剋上の世ならぬ。

を擁して10代將軍足利義植を廃位する政変(明応の政変)がおこった。先の家督争いの際、茶々丸は11代將軍足利義澄の生母を殺害したが、これをとがめた義澄の命をうけ、伊勢宗瑞(北条早雲)が伊豆に侵攻した。茶々丸が山内上杉氏の支持のもと、相模・武蔵・甲斐で数年間抵抗したので、東国の争いは長引いた。

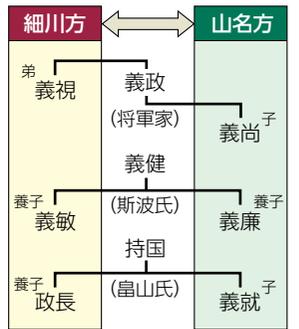
戦国時代の始まり

一族内での家督争いは、8代將軍足利義政のときに將軍家でもおきた。義政の弟足利義視が次期將軍と決められていたが、のちに義政の正妻日野富子が義尚を生み、この両者が家督を争ったのである。この時期、幕府の実権は管領の細川勝元と山名持豊がにぎっていた。勝元ははじめ義視を支持し、持豊は富子と結んで義尚を立てていた。これに、畠山・斯波家の内輪もめもからんで、1467年、細川方(東軍)と山名方(西軍)は武力衝突した。東西両軍は、京都をおもな戦場にして全国の守護大名や国人を集めて戦った。雑兵たちが生活のために足軽として参戦し、離合集散をくり返したので、戦いは1477年の和議まで11年におよんだ(応仁・文明の乱)。この乱は、幕府の權威を失墜させ、享徳の乱とも連動して各地に広がり、日本は戦国時代となった。

戦乱で京都が荒廃すると、文化人であった公家や僧侶らは、安住の地を求めて地方の守護大名や縁のある所領に避難したため、朝廷の機能も著しく低下した。こうした文化人の地方分散で、中央の文化が地方へ伝わっていった。一方、守護大名らが京都に釘づけになる間に、地方では守護代や有力な国人たちが力をのばして、守護大名を倒し、領国の実権をにぎるようになった。こうして下剋上の風潮が強まり、これまでの秩序は壊れ、荘園公領制は崩れていった。

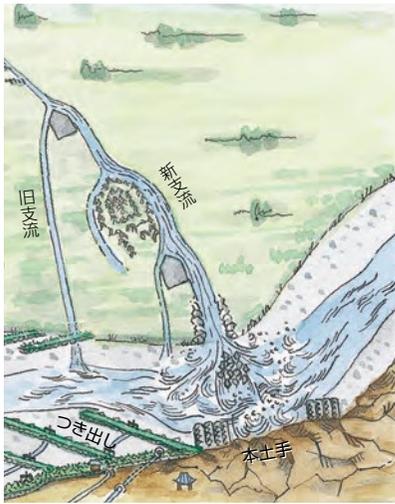


足利氏系図



応仁・文明の乱直前の対立関係 こうした対立関係は、乱の経過によって各氏の利害が異なるようになり、複雑に変化していった。

▶2 天皇は各地の武家に官位をあたえたり、即位・葬儀・改元の費用を求めたりして、もてる權威と職権を用いて絶えず生き残ろうと努めた。また、公家のなかからは、例えば土佐の一条氏や伊予の西園寺氏のように、避難先で戦国大名として活動する者も出た。



信玄堤 甲斐国を領した武田信玄が釜無川の氾濫から耕地を守るためにつくった堤防。支流を二つに分けて流れをかせ、支流がぶつかる釜無川の土手に堤防(本土手)を築いた。本土手には竹を植え、さらに本土手の前につき出しという石積みをつくり、本土手を守る工夫をした。

- ▶1 大名の多くは、血縁関係になぞらえて**寄親・寄子制**とよぶ主従関係を家臣の間で結ばせた。
- ▶2 分国法の一つ「今川仮名目録追加」にみられる「只今、をしなべて自分の力量を以て国の法度も申付け」との今川義元の文言は、この時期の戦国大名の統治意識を明瞭に表現している。
- ▶3 喧嘩両成敗の原理は、家臣どうしが争いごとに決着をつけようとするのを否定し、戦国大名自身に裁判権を集中させた。この考え方は近世社会に引き継がれた。
- ▶4 市場税や営業税を免除したり、座の独占販売などの特権を廃して、自由な商業活動を認めた法令。

史料 分国法

一 喧嘩の事、是非に及ばず成敗を加ふべし。
(信玄家法)、原漢文

一 駿遠兩國之輩或はわたくしとして他国より、よめをとり、或はむこにとり、むすめをつかはす事、自今已後之を停止し了ぬ。
(今川仮名目録)

一 当家畷館の外、必ず国中に城郭を構せらるる間敷候。総て大身の輩を悉く一乗の谷へ引越して、其郷其村にハ、只代官・下司のみ可被居置一事。
(朝倉敏景十七箇条)

口語訳

一、私的な喧嘩については、その理由を問わず処罰する。

一、駿河・遠江両国の家臣は、私的に他国から嫁をむかえ、あるいは婿をとり、嫁に出すことを今後は禁止する。

一、当朝倉家の城以外、決して領国内に城郭を構えさせないようにすること。すべて上級武士は一乗の谷に引越させて、そのあと郷村支配のために代官・下司をおくこと。

33 戦国大名はどのように領国を支配したのか

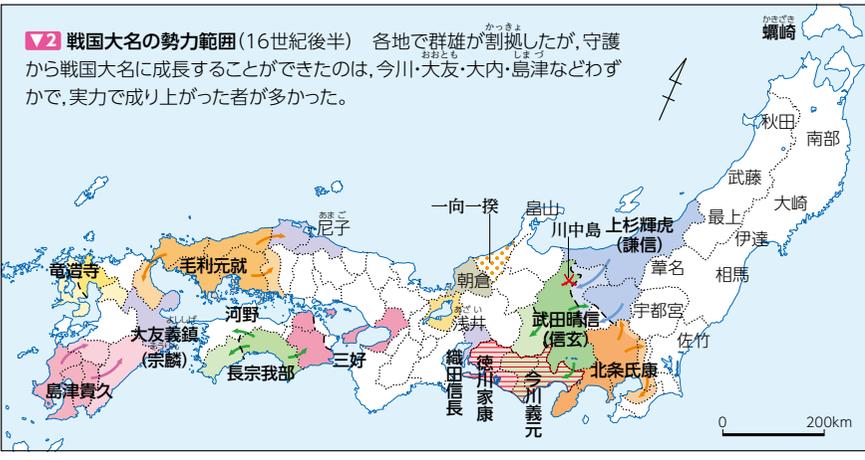
戦国大名の支配

応仁・文明の乱のころの大名は、室町幕府の統治機構からの自立をめざし、国や郡など一定の地域に対して独自の支配権を確立しようとした。国人・地侍などを中小領主として認めたくらんで、彼らを家臣団として編制した。支配下の領地では検地をおこない、段銭・棟別銭・夫役などを課した。こうして、土地と民衆を直接支配し、秩序をもたらした。これらの大名を**戦国大名**という。

戦国大名には、守護大名から成長した者、国人や守護代から実力で守護大名の権限を奪った者などがある。彼らの多くは、数郡から数か国にわたる広い領域を一元的に分国**(大名領国)**として支配した。分国支配にあたっては、明文化した**分国法**を定め、その規範とした。分国法のおもな内容には、大名による家臣の統制、**喧嘩両成敗**など家臣どうしの争いの裁定、民衆支配の原則などがもりこまれた。

また、戦国大名は分国の富強をはかるために、強い武力を背景に権門の権威を否定した。交通や流通をさまたげてきた関所を廃止し、**楽市令**などを発布して商工業者を城下町に集め、商品流通に課税し財源を確保することに努めた。

さらに、治水・灌漑技術、築城技術、鉱山の採掘技術の飛躍的發展をうけて、戦国大名は分国支配と戦時への備えのためにこれらの技術を重んじた。とくに、石見・大森銀山**(石見銀山)**では、16世紀はじめころ、朝鮮から「灰吹法」とよばれる銀精錬技術が伝えられると、大量の銀生産がはじまった。



中国地方 7か国の守護であった大内氏が1551年に重臣陶晴賢(1521~55)に倒され、陶氏もその4年後に安芸の国人毛利元就(1497~1571)に滅ぼされた。

九州地方 伝統的な勢力である薩摩の島津氏、豊後の大友氏のほかに電造寺氏が台頭。

四国地方 国人出身の長宗我部氏が台頭。

戦国大名とアジアの動向

石見銀山産の銀は純度が高く、日本列島を訪れるようになったヨーロッパ人によっても「ソーマ銀」として高く評価され、アジア貿易の決済手段として、広く中国大陸へももちこまれた。15世紀後半から16世紀にかけて、明では銅資源が枯渇して銅銭の質が下落し、主たる支払い手段が銀や紙幣にかわった。また、日明貿易が衰え、倭寇の密輸ルートも明に抑圧された。

こうした東アジア世界の変化をうけて、日本では、洪武通宝や永楽通宝などの渡来銭の供給量では、列島社会の流通経済の需要を満たせなくなった。このため、市場では、粗悪銭(割銭・私鑄銭、鏝銭)などの受け取り拒否(撰銭)が頻繁におこり、流通に混乱をきたすことが多くなった。戦国大名や幕府は、くり返し撰銭令を出して粗悪銭と良銭との交換比率を定め、条件つきで流通させようとしたが、あまり効果はなかった。

その結果、流通経済の発達していた西日本一帯では、銭による決済はしだいに姿を消し、米による決済に移行した。戦国大名にとって兵糧米の確保は絶対必要だったうえに、米が物品貨幣の役目を果たしていたからである。そして、税負担や軍事動員の基準も、銭を基準にする**貫高制**から米を基準にする**石高制**にかわった。一方、経済的に後進地域であった東日本では、永楽通宝をもととする貫高制が続いていた。こうした日本列島の流通や生産表示方法に関する東と西の違いも、東アジア世界と深くかかわる貨幣量の絶対的不足に起因していたのである。

東北地方 地頭出身の伊達氏が台頭。

関東地方 伊勢宗瑞(のちの北条早雲)の子氏綱(1487~1541)が武蔵をおさえ、孫氏康(1515~71)が古河公方を取りこんで関東一円に勢力をはった(→p.92)。

中部地方 守護代出身の長尾景虎(のちの輝虎、上杉謙信、1530~78)が越後をおさえ、甲斐を根拠に信濃へと勢力を拡大した武田晴信(信玄、1521~73)と川中島(長野市)で何度も激突した。また、駿河では今川義元が勢力をのびし、美濃では斎藤道三(?~1556)が守護土岐氏を倒して勢いを強めた。



石見銀山 16世紀に本格的な開発がはじまった。写真は坑道の入口。(島根県大田市)

- ▶5 その技術は、列島内においては、但馬国(兵庫県)生野銀山、佐渡国(新潟県)鶴子銀山、甲斐国黒川金山にも伝えられて鉱産の増大につながった。
- ▶6 石見銀山の中心大森地区の中世・近世の地名「さま」、あるいは「佐摩村」にもとづくよび方。
- ▶7 はじめての撰銭令は大内氏が1485(文明17)年に出し、幕府も1500(明応9)年にはじめて出した。



長篠の戦い 信長・家康軍は1000挺以上の鉄砲を備え、それを馬防柵の内側に配置して一斉射撃をおこない、武田軍を破った。〔長篠合戦図屏風〕、愛知県、徳川美術館蔵

- ▶ 1 石山本願寺との戦いを石山戦争という。1570年から寺が屈服した1580年まで続いた。
- ▶ 2 領主に命じて土地の面積・耕作者・収穫高などを記した土地台帳を提出させた。

信長の統一事業	
1551	父信秀没、家督相続
1555	清洲城（尾張国）に移る
1559	尾張をほぼ平定
1560	桶狭間の戦い
1562	徳川家康と同盟
1567	斎藤竜興を打倒し、岐阜に移る
1568	足利義昭を擁して京都に入る
1570	姉川の戦い
1571	長島一向一揆と戦う（～1574）
1573	義昭を追放、室町幕府滅亡。浅井・朝倉氏を滅ぼす
1575	長篠の戦い
1576	安土城を築く
1582	天目山の戦い、武田氏を滅ぼす。本能寺の変で自害



「天下布武」の印

織田信長 せんおとし 宣教師フロイスによれば、中くらのい青文で華奢な体、髭は少なかったという。（愛知県、長興寺蔵）

36 信長と秀吉はどのようにして天下を統一したのか

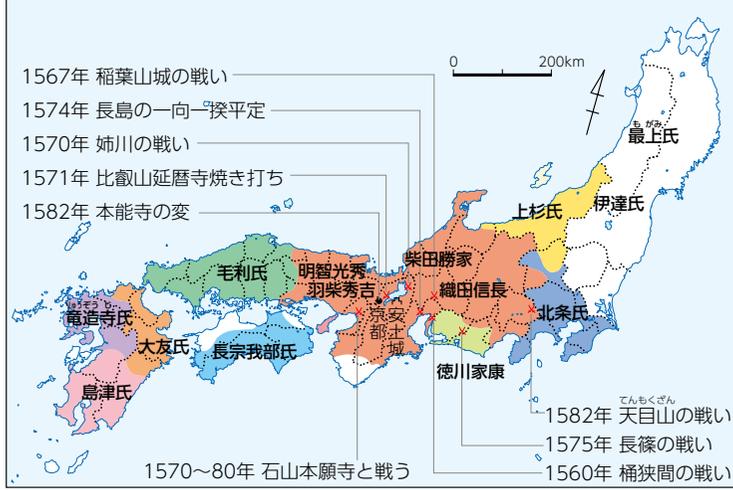
織田信長の統一事業

戦国の動乱のなかで、統一政権としての基礎を築いたのが、**織田信長**であった。信長は、尾張の守護代一族出身で、比較的京都に近く、農業生産力の高い濃尾平野を領国とし、地理的・経済的条件に恵まれていた。

信長は、1560年に**桶狭間の戦い**で駿河の今川義元を破り、今川氏の人質であった松平元康（徳川家康）と同盟を結んで、東方のおさえとした。1567年には美濃の斎藤竜興を倒して、居城を清洲城から稲葉山城（岐阜城と改名）に移し、「天下布武」の印判を使用して、武力による天下統一への意思を示した。翌1568年には室町幕府第13代将軍足利義輝の弟である**足利義昭**とともに京都に入り、彼を15代将軍につかせる。

しかし義昭は、信長の勢力が強大になると、近江の浅井長政や越前の朝倉義景らと結んで信長を除こうとはかった。それに対して信長は、1570年に浅井・朝倉連合軍を近江の姉川の戦いに破り、翌年、宗教的権威であった比叡山延暦寺を焼き打ちにした。そして、1573年に足利義昭を京都から追放し、室町幕府を滅ぼした。また、1574年に伊勢長島の一方向一揆を、翌年には越前の一方向一揆を攻め滅ぼし、1580年には大坂の石山本願寺を屈服させた。こうして中世的な権威を否定する一方、最新兵器の鉄砲を大量に導入して、1575年の**長篠の戦い**では武田信玄の子勝頼の騎馬隊を鉄砲の威力で打ち破った。

信長は、領地を拡大するたびに**指出検地**をおこない、関所を撤廃し**楽市令**を発して商工業の発展に力を入れた。また、自治都市堺を屈服させて直轄地とした。近江には壮大な天主（天守閣）をもつ**安土城**を築いて本拠とし、家臣団を城下町に集住させ、直属軍を編成して機動力の高い軍事力をもって畿内周辺をほぼ統一した。しかし、1582年、中国地方の毛利輝元を討つために自ら出陣して京都に進んだとき、本能寺で家臣の**明智光秀**の謀反にあい、統一事業半ばにして倒れた（**本能寺の変**）。



豊臣秀吉の全国統一

信長のあとに統一事業を完成させたのが、尾張の地侍の子に生まれ、信長に仕えて頭角をあらわした**豊臣（羽柴）秀吉**であった。毛利攻めのさなか、本能寺の変を知った秀吉は、ただちに京都に軍を返し、明智光秀を山崎の戦いで破った。翌1583年には信長の重臣であった柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで破って、信長の後継者としての地位を固め、石山本願寺の跡地に**大坂城**を築きはじめた。1584年には、**小牧・長久手の戦い**で徳川家康と戦ったが、屈服させることができず、和議を結んだ。1585年には、**長宗我部元親**を屈服させて四国を平定し、朝廷からは**関白**に任じられた。1586年には、太政大臣に就任して後陽成天皇から豊臣の姓を授けられ、1588年、京都に新築した聚楽第に天皇を招いて、諸大名に自らへの忠誠を誓わせた。

関白となった秀吉は、戦国大名どうしの争いを停止することをはたさかけるようになり、1587年、これに違反したとして九州の**島津義久**を降伏させるとともに、1590年には小田原の**北条氏政**を滅ぼした（**小田原合戦**）。さらに**伊達政宗**をはじめとする東北の諸大名をも屈服させて、全国統一を完成させた。

豊臣政権は、近畿地方を中心に約220万石の**蔵入地**（直轄領）をもち、ほかに佐渡の金山、石見・生野の銀山などを直轄地にして、**天正大判**などの貨幣を鑄造した。また、京都・大坂・伏見のほか、堺・博多・長崎などの重要都市も直轄支配した。

さらに秀吉は、側近の石田三成らを**五奉行**として政務を分担させ、検地や裁判、大名の支配・統制などの実務にあたらせた。また、有力大名のなかから徳川家康をはじめとする**五大老**を選び、重要政務を合議させた。しかし、政治組織は未整備に終わり、秀吉の死とともに、大名間の対立が表面化していった。

天下統一関連地図（1582年）

秀吉の統一事業	
1582	本能寺の変。山崎の戦いで明智光秀を破る
1583	賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破る。大坂城を築く。近江で検地
1584	小牧・長久手の戦い
1585	関白に就任。四国平定
1586	徳川家康が秀吉に臣従する。太政大臣に就任。豊臣に改姓
1587	九州平定。伴天連追放令
1588	刀狩令・海賊停止令を出す
1590	北条氏を破り、天下統一
1592	文禄の役（～1593）
1597	慶長の役（～1598）
1598	伏見城で死去

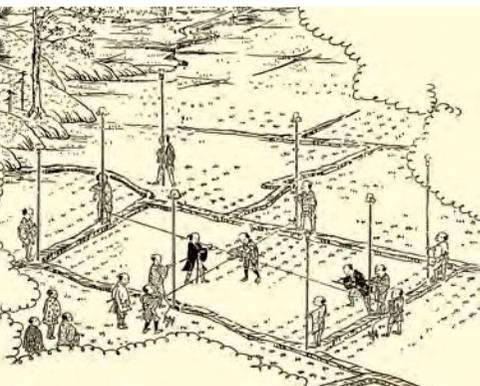


豊臣秀吉（京都市、高台寺蔵）



天正大判 重さ165gの金貨。（日本銀行貨幣博物館蔵）

- ▶ 3 ほかに**浅野長政**（1547～1611）・**増田長盛**（1545～1615）・**前田玄以**（1539～1602）・**長束正家**（？～1600）。
- ▶ 4 ほかに**前田利家**（1538～99）・**毛利輝元**・**宇喜多秀家**（1572～1655）・**小早川隆景**（1533～97）、隆景死後は**上杉景勝**（1556～1623）。



長さ	6尺3寸=1間 (約191cm)
面積	6尺3寸 (1間) 四方=1歩 30歩=1畝 10畝=1段 (反) 10段=1町
容積	1升=10合 (約1.8L) 10合=1斗 10斗=1石

面積と容積の統一
検地のようす 梵天竿などを立てて縄をはり、田の面積を測っている。これは江戸時代のものであるが、太閤検地も同様におこなわれたと考えられている。〔徳川幕府景治要略〕



検地帳

37 秀吉の政治と対外政策はどのようなものか

太閤検地と兵農分離

秀吉は、1582年以後、全国規模で検地を実施した(太閤検地)。この検地では、枡の大きさを京枡に統一したのち、土地の面積の単位を町・段(反)・畝・歩に統一し、1段あたりの米の標準収穫高(石盛)を決め、石盛に面積を乗じて石高を算定した。さらに、田畑一区画(一筆)ごとに等級・面積・年貢負担者(名請人)を決め、これらを**検地帳**に登録した。こうして、荘園制のもとで何人にも土地の権利が重なっていた状態を整理し、一つの土地の年貢負担者を一人に決めた(一地一作人の原則)。検地帳は村ごとに作成され、年貢は村単位でかけられた。検地帳に登録された年貢負担者は、その土地の耕作権を認められるとともに、連帯で年貢納入の責任を負うことになった。また、秀吉は全国の大名に領国の検地帳(御前帳)と**国絵図**の提出を命じた。全国の土地が同じ基準で把握され、大名の領地も石高で示されるようになり、大名は石高に応じた軍役を負担した。

秀吉は、在地の住民が一揆をおこさず、農業に専念するように、1588年

史料 刀狩令(小早川家文書)

一 諸国ノ百姓、刀、脇指、弓、やり、てつほう、其外武器のたくひ所持候事、堅御停止候。其子細者不入入道具をあひたくはへ、年貢所当を令難洗、自然一揆を企、給人にたいし非儀の動をなすやから、勿論可有御成敗。然者、其所之田畠令不作、知行ついでになり候之間、其国主、給人、代官として右武器悉取あつめ可致進上事。

一 右取をかるへき刀、脇指、ついでにさせらるへき儀にあらす候之間、今度大仏御建立の釘かすがひに可被仰付。……

一 百姓は農具さへもち、耕作専に仕候へハ、子々孫々まで長久に候。百姓御あはれみをもつて、如此被仰出候。……

天正十六年七月八日(秀吉朱印)

一 諸国の百姓が、大小の刀・脇指・弓・槍・鉄砲その他の武器類をもつことをかたく禁止する。その理由は、不必要な武器類をもっていると、年貢や雑税を出し渋り、おのずと一揆を企て、その土地の領主に對してけしからぬ行為をする。そういう者どもは、成敗されることとなる。そうならば、その者の田畑は耕作されず土地がつぶれてしまうので、その国の大名、土地の領主、代官は、右のような武器類をすべてあつめ献上しなさい。

一 右のようにとり集めた大小の刀・脇指は、むだにしまわすのではなく、この度の大仏殿建立の釘・かすがいとして使用することとなる。

一 百姓は農具だけをもって、耕作に専念さえていれば、子孫代々永久に続くものである。百姓への御情けから(秀吉公が)このように命じられたのである。

天正十六(一五八八)年七月八日(秀吉朱印)

- ▶ 1 太閤検地や江戸時代初期の検地によって村切りがおこなわれ、中世の惣村が近世の村に整理されていった。
- ▶ 2 追放令後イエズス会領となっていた長崎を没収し、同地でのポルトガル貿易を支配下におこうとしたが、失敗した。1596(文禄5・慶長元)年には畿内周辺の宣教師ら26人が長崎で処刑される事件があったが、キリスト教の取り締まりは豊臣政権が倒れるとやむやみになった。
- ▶ 3 海賊取締令ともいう。秀吉政権は、勘合貿易の復活を対外政策の主要な課題の一つとしており、その条件を整えるため、明・朝鮮が要求した倭寇の禁圧を実現しようとした。

史料 伴天連追放令(松浦家文書、一部抜粋)

一、日本ハ神国たる處、きりしたん国より邪法を授候儀、太以不レ可然候事

一、伴天連其智慧之法を以、心さし次第第二禮那を持候と被思召候へハ、如し右日域之仏法を相破事、曲事二候条、伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日之間ニ用意仕、可一帰国候……

一、黒船之儀ハ、商売之事二候間、各別候之条、年月を經、諸事売買いたすへき事

天正十五年六月十九日

口訳

一、日本は神国であるので、キリスト教国から邪法を授けられることは、はなはだ不都合である。

一、宣教師は知識や技術をもって布教し、信者は自らの意思によって入信していると(秀吉は)おぼし召されていたが、日本の寺社仏閣を破壊することはけしからんことなので、宣教師は日本においてははならない、今日から二十日の間に用意して、帰国すること。

一、南蛮船は商売に関するものなので格別である。以後も年月を重ねて商売しなさい。

天正十五(一五八七)年六月十九日

に**刀狩令**を出して、刀・槍・鉄砲などを所有することを禁じた。1591年には、武家奉公人が町人・農民身分になることなどを禁じ、1592年には、秀次の命令として、朝鮮出兵の人員を確保するために全国で戸数や人数を調べる戸口調査を実施した(**人掃令**、**身分統制令**)。このような政策によって兵農分離が進み、新しい近世社会の基礎が構築されていった。

秀吉の対外政策と朝鮮侵略

1587年、秀吉は九州出兵のとき、長崎が大村純忠により寄進され、イエズス会領になっていること、ポルトガル人が日本人を奴隷として海外に連れていっていることなどを知り、**伴天連追放令**を出した。しかし、追放令後も、宣教師たちの海外退去はほとんど実施されず、長崎での貿易は奨励されており、取り締まりは不徹底に終わった。

また、秀吉は1588年の**海賊停止令**によって、日本国内の海賊行為や倭寇を禁圧し、東アジアのなかで日本中心の国際秩序をつくるため、インドのゴアにいるポルトガル総督、フィリピンのマニラにいるスペイン総督、琉球、高山国(台湾)に手紙を送り、服属と入貢を求めた。

さらに秀吉は、対馬の宗氏を仲介として、朝鮮国王に秀吉への服属を求め、明征服の先導を命じた。朝鮮が拒否すると、1592年、西国大名を中心とする約16万の大軍を朝鮮に送った(**文禄の役**)。日本軍は朝鮮北部まで侵攻したが、朝鮮民衆を含む義兵のはげしい抵抗、**李舜臣**の率いる朝鮮水軍、明の援軍によって撤退を余儀なくされた。1597年には講和交渉が決裂し、ふたたび約14万の大軍を送ったが(慶長の役)、朝鮮側の抵抗に苦しみ、翌年秀吉の病死を機に撤兵した。

この侵略戦争は朝鮮を荒廃させ、明だけでなく豊臣政権の崩壊をも早めた。また、日本軍が連行した多くの朝鮮人によってさまざまな技術や知識が伝えられ、近世日本の文化・社会に大きな影響をあたえた。



朝鮮出兵地図 肥前国名護屋に前線基地を設け、加藤清正・小西行長らが派遣された。



亀甲船 李舜臣が工夫したといわれる朝鮮水軍の軍船を復元したもので、屋根を亀甲の鉄板で装甲している。(韓国士官学校所蔵の復元模型)



耳塚 秀吉軍は朝鮮将兵の耳や鼻を首級のかわりに秀吉のもとに送った。秀吉がそれらを供養するために京都の方広寺の西に建てた塚。

- ▶ 4 秀吉による朝鮮侵略は、朝鮮では壬辰・丁酉倭乱とよばれている。

地域の歴史 4 近世の蝦夷地とアイヌの人々

アイヌの人々と松前藩

アイヌの人々は、中世末期にはサハリン（樺太）、千島、北海道本島から本州の津軽・下北半島にかけて地域ごとにまとまりをもって暮らしていた。江戸時代に入り、徳川家康は1604（慶長9）年に松前氏に独占的な蝦夷地（北海道本島）の支配交易権を保障した。これにより蝦夷地は松前氏を通じて支配されることになった。以後、将軍の代替わりごとに朱印状が出され、その地位は保障された。松前藩は、農業生産に立脚しない藩であり、アイヌ交易や松前・箱館などの港の運営が主たる財源であった。また、国家を形成していなかったアイヌ民族との間では、「撫育」というたてまえで幕府の巡見使や松前藩主に対して「御目見」（ウイマム）の儀式がおこなわれるようになった。

商場知行制とシャクシャインの蜂起

松前氏は、蝦夷地を松前藩の直接支配する和入地とアイヌの人々が居住する蝦夷地に分けた。和入地以外の蝦夷地に和人が自由に行くことは禁じられていた。そして寛永期（1624～44年）のころから、家臣にアイヌと交易場（商場）で交易する権利を、他大名・家臣にあたえられる知行と同じものとして給付し、家臣はそこで米・酒・漆器などとアイヌ側の毛皮・干鮭などを物々交換して収入を得るようになった（商場知行制）。アイヌの人々は和入たちと間での自由な交易や文化的な接触もできなくなっていった。

▼ **アイヌと松前藩主** 手をつないで腰をかかめる正式の礼法で藩主に座敷で面会するアイヌの代表者。松前藩は、のちに庭先に場所を変更した。（函館市中央図書館蔵）



▼ **アイヌの首長** 1789年におきたクナシリ・メナシ地方のアイヌの蜂起で、松前藩に協力して鎮圧にあたったアイヌの首長たちの一人。松前藩主の弟で家老の蠣崎波響が描いた。（函館市中央図書館蔵）



▼ **松前の町** 松前氏の城下町として、また港町として栄えた。（北海道松前町蔵）

1669（寛文9）年には、商場での不公平な交換への不満から、近世最大のアイヌ民族の抵抗といわれるシャクシャインの蜂起がおこった。この蜂起によって広範な地域で交易船の船頭や水夫たちが多数殺害された。シャクシャインは、和睦という松前藩の口実を誘い出されて殺され、蜂起は鎮圧された。

しかし、ほどなく商場での交易も行きづまってきた。18世紀になると藩の財政が悪化し、商人たちが運上金を支払ってこの経営を請け負うようになった（場所請負制）。アイヌは、請負場所での過酷な労働と不正な商取引に苦しみ、1789（寛政元）年にクナシリ・メナシで蜂起した。

ロシアの脅威と蝦夷地の直轄化

18世紀後半から、ロシアが交易を求めて蝦夷地にやってくるようになり、幕府は対応をせまられた。そして、アイヌの人々と蝦夷地を松前藩にまかせるといふ従来のやり方から、幕府の直轄地にしようという動きがみられるようになった。1802（享和2）年に東蝦夷地を松前藩から取り上げて永久直轄地とした。



地域の歴史 5 近世の琉球と奄美

「古琉球」から「琉球口」へ

近世の琉球は1609（慶長14）年の島津氏（薩摩藩）の軍事的征服からはじまる。幕府は島津氏の琉球領有と支配を認めたが、中世以来、明の朝貢国であった琉球王国は存続させた。薩摩藩は琉球全土を検地し、藩主は国王尚寧に領地判物（領地を安堵する文書）をあたえ、日本型の封建的主従関係のもとにおいた。琉球から薩摩に派遣する年頭使が1613（慶長18）年にはじまって定例となり、1624（寛永元）年に「道の島」（奄美3島）を感入地とした。1631（寛永8）年には那覇に在番奉行をおき、国王の代替わりや行政・中国関係や海防まで管理・統制し、キリスト教や日本風の髷・髪・衣装などを禁止した。日本と琉球の間のヒト・モノの往来は、薩摩藩の管理下におかれ、渡航・居住は薩摩藩の役人か船頭・水主（水夫）などに限られた。

その一方で幕府は、1620年代に明との講和交渉に見切りをつけ、中国との関係は、「通信」（国交）を避け、「通商」（民間の貿易）だけを維持するという方針に転換した。島津氏の琉球征服で警戒心を強めた明も、1633年に新国王尚豊を琉球国王に冊封した。翌年、薩摩藩は、尚豊の代替わりを感謝する使節（謝恩使）を将軍家光に送ったが、このとき幕府は琉球の役割を「唐口の商売」（中国貿易）とした。1639（寛永16）年にポルトガルと断交した際、幕府は対馬藩・薩摩藩に、それぞれ朝鮮口・琉球口で中国産生糸・絹織物などの輸入に努めるように命じている。

なお謝恩使は、将軍の就任を祝う慶賀使とともに定例となり、ペリー来航の直前まで続いた。



▼ **奄美での砂糖の取り引き** 幕末に薩摩藩士によって描かれたもの。（『南島雑話』、奄美市立奄美博物館蔵）

近世の琉球と奄美

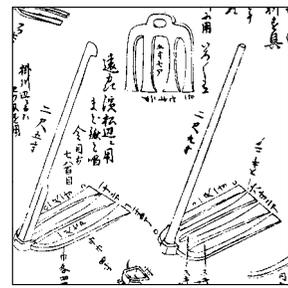
薩摩藩の支配を通じて、近世琉球の国家・社会・文化が形成された。まず、古琉球以来の伝統的な宗教儀礼と政治を切り離して、王府の組織を合理化し、黒糖・ウコンなどの専売制によって王府財政の再建がはかられた。藩へ年貢などを上納するため、農村支配を整備・強化し、農業生産を奨励したので、王国は貿易型から農業型に変貌した。人口も増加し、首都首里と那覇が都市として発展し、それまで在留していた外国人（華人・朝鮮人・日本人など）も琉球人の戸籍に編入された。士族と百姓からなる身分制が確立し、士族を中心に伝統社会・文化が成熟して、歌謡集「おもろそうし」の編纂などがおこなわれた。

中国（明・清）との朝貢貿易は琉球王国の解体（1872〔明治5〕年）までおこなわれたが、藩の出資による代理貿易であり、日中両国政府の政策や明清交替などの政治変動などで、藩が期待したほどの利益はあがらなかった。そのかわりとなったのが、年貢（貢米・貢糖）と琉球の特産物、とくに黒糖の専売である。

黒糖は王府・藩を通して大坂市場で売られて大きな利益をあげ、藩財政の主要な柱となった。日本人の生活水準が向上するとともに、黒糖の需要も高まってきた。19世紀にはそのほとんどを薩摩藩がまかした。

その70%以上を生産した奄美3島は、実質的な藩の植民地として、黒糖生産のためのモノカルチャー社会とされ、貨幣の流通も禁止されるなど、きびしい搾取のもとにおかれた。

▼ **琉球の使節** 1710（宝永7）年、江戸城へ向かう琉球使節の一行。（『琉球中山王両使者登城行列』、国立公文書館蔵）



備中鍬（『農具便利論』）

江戸時代の農具 千歯扱で穂から籾を落とし、から棹で打って殻をとり、箕・唐箕を使用して殻を吹き飛ばしている。（『老農夜話』）

年度	石高 (単位 万石)	耕地面積 (単位 万町歩) 合計
1598(慶長3)	1,851	180
1645(正保2)	2,313	
1697(元禄10)	2,580	296.1
1721(享保6)		
1830(天保1)	3,043	
1872(明治5)	3,222	358.7

耕地面積と石高の変化

▶1 干鰯は鰯を干して肥料にしたもの。油粕は菜種などから油をしぼり取ったあとに残ったもの。メ粕は鰯・鯿・さんまなどの生魚を煮て、油を取り出し、乾燥させたもの。

▶2 1697(元禄10)年刊行。出版されたものとしては日本最古の農書である。19世紀に入ると農学者大蔵永常が『広益国産考』と『農具便利論』を著した。



万石どおし 金網の上に穀類を流し、穀粒の大きさによって選別したり、細かなごみを下に落とす。これは幕末ころに製作された改良型。なお千石どおしという白米と糠を分けるための道具もある。（奈良県立民俗博物館蔵）

43 江戸時代の産業はどのように発展したのか

農業の発達

幕府や諸藩は、年貢米の収入を増やすために村の耕地の拡大に努め、湖沼を干拓し、灌漑用水を整備するなどして新田開発を進めた。また、幕府や藩が商人資本を借りて開発を進める町人請負新田もしだいに増えた。

農具では、より深く耕せる備中鍬や脱穀用の千歯扱、籾の選別用の唐箕や万石どおしが発明され、作業の効率化をもたらした。灌漑用水が整備され、水を田に汲み上げる踏車も使用された。

また、商品経済の発達にともない、養蚕用の桑、衣料の原料の麻・綿（木綿）、照明に用いる菜種（油）、ろうそくの原料の燭、染料の藍・紅花、嗜好品としてのたばこ、茶、塗り物や蒔絵に用いる漆、和紙の原料の楮など、商品作物の栽培が各地で盛んになり、それぞれ特産物として発達した。

こうした収益性の高い商品作物の栽培のための肥料として、自給的な下肥（人糞尿）・草木灰・刈敷・厩肥のほか、干鰯・油粕・メ粕などの購入肥料（金肥）の使用が広まった。また、こうした農業技術の普及に大きな役割を果たしたものに農書があり、なかでも宮崎安貞の『農業全書』などは広く流布した。

諸産業の発達

農業以外の産業の発達も著しかった。林業は、都市の発達とともに建築資材や炭・薪などの需要が増大し、幕府・諸藩の保護のもとに植林作業などを通して各地で盛んになった。木曾の檜や秋田・吉野の杉などが有名である。

水産業では、網を使用する上方漁法が全国に広まり、網元が多くの漁民を組織して、地引（曳）網・船引網・定置網漁などをおこなうようになった。房総半島の九十九里浜の鰯漁や、土佐の鰹漁、土佐・紀伊の捕鯨、蝦夷地の鯿・昆布漁などが知られる。瀬戸内海沿岸では、入浜式塩

田による製塩が盛んになり、赤穂などで大量の塩が生産されるようになった。

鉱山業では、佐渡・伊豆の金山、石見・生野の銀山などが幕府の直轄地であったが、それらの採掘量は17世紀半ばから減少し、かわって伊予の別子、下野の足尾、出羽の尾去沢などで銅の採掘が盛んになった。

商業の発達

各地で産業が盛んになると三都や各地の城下町などの都市を拠点に、商品の仕入れ・販売を扱う問屋が商業の中心を占めるようになった。問屋は業種ごとに仲間（組合）をつくり、営業を独占して利益をあげた。問屋仲間の連合組織として江戸に十組問屋、大坂に二十四組問屋が結成され、江戸・大坂間の船による荷物輸送を効率化し、さらに流通する商品の独占がはかられた。幕府は18世紀になるとこのような同業者の仲間を公認することで運上金・冥加金を負担させた。こうして公認された営業の独占権を株とよび、幕府により公認された仲間を株仲間といった。また、都市に集まってくるさまざまな生産物は、それぞれの卸売市場のなかで、問屋から仲買人を経て、小売商人に卸され、販売されるという仕組みで専門化・分業化していった。各種の商品を売って生活する小売商人の多くは、自分の店をもたず、売り歩いて販売し、振売・棒手振などとよばれた。

経営者としては、元禄時代に材木を扱って投機的な商法で成功した江戸商人の紀伊屋屋文左衛門、米市場で財をなした大坂商人の淀屋辰五郎などがいたが、一代で終わった。それに対して越後屋呉服店を創立した伊勢国松坂出身の江戸商人三井高利など、新商法と堅実な経営でその後

貨幣制度

江戸幕府は、貨幣鑄造権を独占し、金座・銀座・銭座で、それぞれ金貨・銀貨・銅貨の三貨を鑄造した。金貨は小判などの計数貨幣で、銀貨は丁銀・豆板銀などの秤量貨幣であった。銅貨は寛永通宝を大量に鑄造した。17世紀後半以降、幕府の許可を得て藩札を発行する藩が増大した。金貨は東日本を中心に使用され（金遣い）、銀貨は西日本を中心に流通した（銀遣い）。三貨の交換比率は時々の相場によって絶えず変動した。この交換を扱ったのが両替商で、幕府や藩の公金の出納や為替業務を担当した。両替商としては、江戸の三井、大坂の鴻池、住友などが有名で、彼らは幕府や藩の財政を支え、富を蓄積した。



江戸時代の貨幣と紙幣

金貨には大判・小判・一分金・一朱金、銀貨には丁銀・豆板銀があった。①慶長大判 10両。通常の取り引きには用いられず、軍用・贈答用などに用いられた。②慶長小判 金1両に通用。③慶長一分金 4枚で1両に通用。④慶長丁銀 ⑤寛永通宝 銅貨、1文に通用、1636年以後、何度も鑄造されたがすべて寛永通宝という名称であった。⑥慶長豆板銀 丁銀とともに重量をはかって用いる秤量貨幣。①～⑥は日本銀行貨幣博物館蔵。⑦藩札 大和国郡山藩のもの。藩札は領内だけに通用した。

▶3 運上金は業種ごとに一定の税率を課した営業税。冥加金は営業許可に対するの献金で、定まった税率はなかった。



越後屋の店内 創業者の三井高利が店頭販売や「現金掛値なし」など新しい商売法をはじめると、庶民にうけて繁盛した。天井から商品の見本や担当の店員の名前がつけられている。

第4編 近代1 明治期

明治期の日本と世界

● 欧米諸国における国民国家の形成と世界進出

イギリスやフランスをはじめとするヨーロッパ諸国やアメリカ合衆国は、革命や内戦・独立戦争を通じて、19世紀までには国民国家へと転換していった。国民国家とは、明確な国境をもち、言語や歴史を共有する国民によって構成される国家のことである。

さらに、イギリスが18世紀に産業革命を実現し、19世紀になるとアメリカ・フランス・ドイツで産業革命が進行して、資本主義社会が形成された。各国では商品や余剰資本を輸出するため、海外市場を求めて世界へ進出した。その結果、19世紀後半から第一次世界大戦の時期にかけて、イギリス・フランス・ドイツなどのヨーロッパ列強やアメリカ、日本が植民地や勢力圏の獲得競争をおこない、世界を分割していった（帝国主義）。

● アジア諸地域と近代化の模索

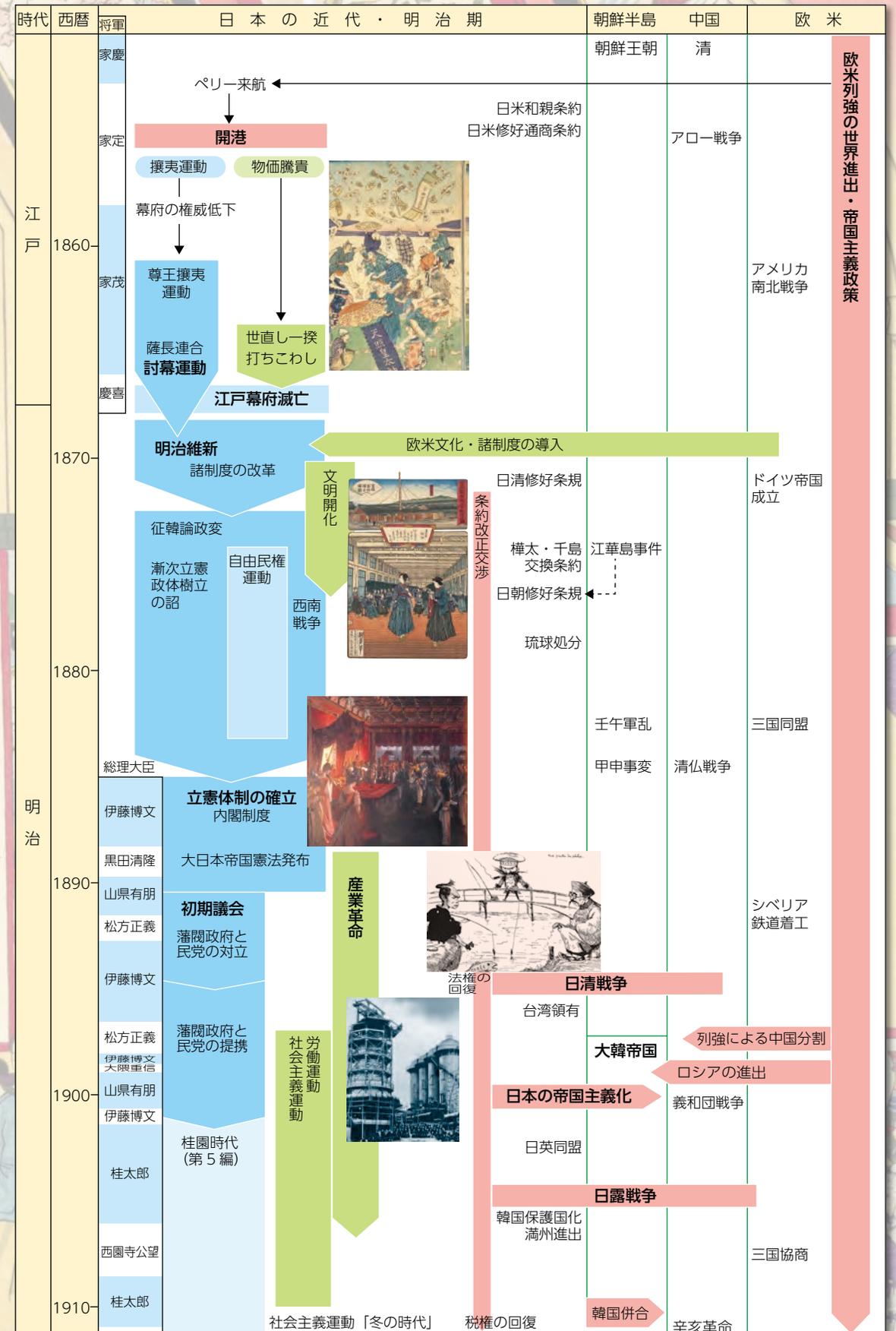
ヨーロッパの列強はアフリカ・アジアの諸地域を「無主の地」（ほかのどの国にも属していない土地）として植民地にしていった。しかし、東アジアにおける中国・朝鮮・日本の3国とは、不平等ながらも条約を結んだように、「国家」として認められたため、3国は欧米の植民地となることを免れた。

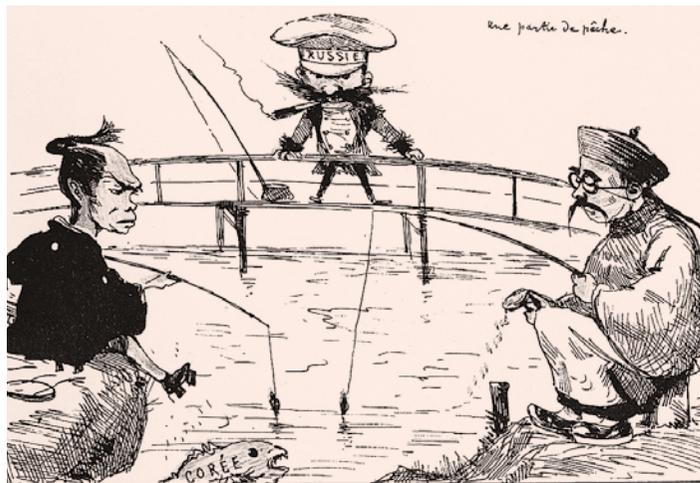
東アジアなどの非ヨーロッパ地域では、独立を維持するために、西ヨーロッパの近代社会を象徴する制度や技術、さらにはその背後にある価値観を模範として摂取しようとする動きがみられた。しかし、各地域の伝統的な価値観と衝突することになるため、反発や抵抗を生むことも多かった。

● 日本の近代化

ペリーの来航によって西欧国際社会に強制的に編入された幕末期の日本では、当初、「攘夷」が猛威をふるった。しかし、攘夷を主張して江戸幕府を倒した明治新政府は、政権をにぎるとすぐに「攘夷」を棄てたどころか、一転して「文明開化」を進めていった。それは、政治や経済のみならず、文化や風俗にもおよぶ、徹底的なものであった。さらに、1880年代前半になると、条約改正を実現するため、極端な欧化政策が進められた。

その結果、日本も欧米にならって、憲法や議会政治をはじめ、さまざまな制度を導入し、国民国家の建設を進めた。また、対外的にも、19世紀末には日本も帝国主義国の一員となった。





漁夫の利 日本(左)と清(右)のどちらが魚(朝鮮)を釣り上げるか、ロシアがなりゆきを見守っている。朝鮮への進出をめぐる3国の動きを風刺したもの。(ビゴー筆「トバエ」1887年2月15日)

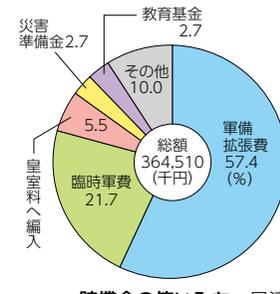
朝鮮の新式軍隊
日本の近代化にならって軍制を改革して1881年に創設された新式軍隊。政府は新式軍隊を士官生徒として優遇したが、その反面、旧式軍隊の待遇は悪化した。



金玉均 日本の明治維新をモデルに急進的な開化をめざして活動した。甲申政変後は日本に亡命、1894年国王派によって上海で暗殺された。



日清戦争地図 朝鮮の支配権をめぐる日清両国の戦争であり、陸地での戦いは大半が朝鮮でおこなわれた。



賠償金の使いみち 日清戦争の賠償金2億両は、当時の日本円で3億1000万円にあたる。遼東半島還付の代償の3000万両と利息をあわせて、日本は、1894年度の国家歳入(一般会計)の4倍近い額の約3億6500万円を得たが、そのうちの約3億1000万円が軍備拡張費などにあてられた。なお、日清戦争後の1895年度の日本政府の歳入合計は約2億8000万円にふくらんだ。

▶1 日本による琉球処分は清を強く刺激し、清は朝貢関係にあった朝鮮を、近代世界における「属国」へ転化する試みをはじめた。朝鮮では、多数の日本商人が無関税特権を利用して米を投機的に買いつけたことが、豊臣秀吉による朝鮮侵略の記憶をよみがえらせた。さらに、日本人を軍事教官とする近代的軍隊が朝鮮に創設されたため、旧式軍隊の兵士は不満をいだいていた。

▶2 甲申政変失敗直後の1885年、福沢諭吉が経営していた『時事新報』に「脱亜論」が掲載された。この論説では、アジア諸国は「正に西洋人がこれに接するの風に從て処分すべきのみ」として、日本はアジアから脱して西欧の列に加わるべきだと説いていた(脱亜入欧)。

▶3 1890年の第1議会で、山県有朋首相は施政方針演説をおこない、日本は一国の独立を維持するには、領土を意味する主権線だけでなく、利益線も保護しなければならぬと強調した。利益線とは主権線の安危に密接な関係のある区域を意味し、具体的には朝鮮半島を指していた。

68 日清戦争はなぜおきたのか

朝鮮問題 朝鮮では1882年、給米の不正支給がきっかけで旧式軍隊が暴動をおこし、物価騰貴に苦しんだ一般民衆も加わって日本公使館を襲撃した(壬午軍乱)。日清両国がこれに介入、出兵して緊張が高まったが、清はこの事変に荷担した大院君(国王高宗の父)を逮捕して中国に連行したため、衝突は回避された。

2年後の1884年には金玉均・朴泳孝ら急進開化派がクーデタをおこし(甲申政変)、それに呼応した日本公使館守備兵や政府軍の一部が王宮を制圧した。しかし、クーデタはただちに朝鮮に駐留する清軍に鎮圧された。翌1885年に日清間で天津条約が結ばれ、朝鮮から日清両軍が撤退するとともに、出兵の際には相互に事前通告することが決められた。そののち、日本は軍隊制度を、対外戦を可能とする師団制に切り換え、徐々に海外派兵が可能な環境をととのえていく。

日清戦争 1894年春、朝鮮半島で東学の指導者全捧準に率いられた農民軍が全羅道の全州府を占領する(甲午農民戦争)と、清は朝鮮政府の要請に応じて出兵に着手するとともに、天津条約にもとづいて日本に通告した。ときの陸奥宗光外相は清に対抗して日本も出兵しながら、対外的にはあくまで日本が受け身の立場であることを示すために、朝鮮内政改革を日清共同でおこなうことを清に提議した。しかし、清は日本の提案を拒絶した。イギリスの支持も得たとの開戦を決意した日本は、7月、朝鮮王宮を軍事占領するとともに、朝鮮の豊島沖で戦端を開いて、日清戦争がはじまった。以後、陸地での戦いはおもに朝鮮半島においておこなわれ、さらに日本軍は朝鮮・中国の国境をこえて遼東半島まで進撃するにいたった。

下関条約と三国干渉

1895年2月には清軍のほこる北洋艦隊が威海衛で日本軍に降伏し、日本の勝利は決定的となった。日清間の講和交渉は、3月から下関ではじまり、4月に日本全権伊藤博文・陸奥宗光と清国全権李鴻章との間で条約が調印された(下関条約)。その内容は、(1)清は朝鮮の完全な独立を承認する、(2)清は遼東半島および台湾・澎湖諸島を日本に割譲する、(3)清は2億両(約3億円)の賠償金を日本に支払う、(4)清は新たに沙市・重慶・蘇州・杭州の開港を認める、というものであった。

この条約によって、朝鮮と清との朝貢関係がなくなった。明治政府は戦争によるはじめての海外領土として台湾を獲得し、日本も異民族を支配する帝国となった。また、賠償金は、日清戦争後の軍備拡張や、官営八幡製鉄所などの国内産業の近代化、金本位制(1897年実施)の財源などにあてられた。さらに、新たな4都市の開港によって、中国市場に日本も西欧並みに進出することが可能となった。

下関条約の調印直後、東アジアへの進出を企図していたロシアはフランスやドイツとともに、清の首都北京に近い遼東半島を清へ返還するよう日本に勧告した(三国干渉)。第2次伊藤博文内閣は、問題の処理を列国会議にゆだねるべきか、三国干渉を容認して遼東半島を中国に返還するべきかの選択をせまられ、当初は前者を決定した。しかし、陸奥外相の反対で、最終的に後者を採用することとなった。新聞や雑誌は、三宅雪嶺が新聞『日本』に「嘗胆臥薪」という論説を掲載するなど、伊藤内閣の責任を糾弾した。

▶4 国内外の情勢不安を背景として1860年代におこった、キリスト教(西がく)に対抗する宗教。「天一人一如」の実現により、地上の天国化をはかろうとしたが、政府はこれを邪教として弾圧した。

▶5 大本営とともに広島に移された議会は、開戦後、全会一致で臨時軍事費を可決した。対外硬派や内村鑑三(1861~1930)などの知識人も「義戦」として戦争を支持するようになった。さらに、中国人に対する蔑視観が日本社会で広まるようになった。

▶6 「臥薪嘗胆」という中国の故事にもとづく。うけた恥や恨みを忘れず、それをはらすために苦勞することをいう。



台湾総督府 日本が総督府として建設したこの建物は、台湾の総統府として現在も使用されている。



台湾のゲリラ兵士 日本は台湾を領土としたが、以後民軍などとよばれたゲリラ兵に苦しめられることになった。〔風俗画報〕



韓国の独立門(ソウル市) 日清戦争後、清朝との朝貢関係から解放された朝鮮王朝は、それまで清朝の使節をむかえ接待していた慕華館を独立館とかえ、その門(迎恩門)を取り壊して、あとに新しく独立門を建てた(写真の左側が独立門、右側は残った迎恩門の柱礎)。



義和団戦争で北京に出兵した連合軍兵士 右から、日本、イタリア、オーストリア、フランス、ドイツ、インド(英領)、ロシア、アメリカ、イギリス。義和団戦争は日本では北清事変とよばれた。日本は「極東の憲兵」としてヨーロッパ列強とともに連合軍を組織したが、このことは、日本も帝国主義国家の一員となったことを意味していた。

69 日清戦争後の東アジア情勢はどのように推移したのか

台湾統治

下関条約の締結後、日本軍は1895年5月に台湾に上陸し、日本の領有に反対する人々を武力で

おさえつけ、翌月台北を占領した。日本は台湾を統治するために、台湾総督府を設置し、初代総督に海軍軍令部長樺山資紀を任命した。陸海軍の大將・中將から任命された台湾総督は軍隊統率権をもち、行政権のほかにも立法権を有するなど、絶大な権力をふるった。また、土地調査事業や旧慣調査をおこない、植民地の基幹銀行として台湾銀行を創設した。三井財閥の出資によって台湾製糖株式会社が設立されるなど、製糖業を中心に資本主義の育成もおこなわれた。

その一方で、台湾総督府は漢族系住民の反抗を武力で鎮圧したあと、山岳部の少数民族の服属を進め、制圧するのに20年かかった。しかし、1930年には、少数民族の蜂起(霧社事件)がおきた。台湾総督府は軍や警察を動員してこれを徹底的に鎮圧した。

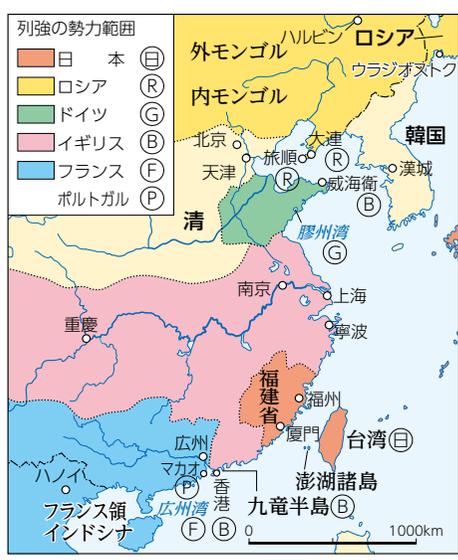
日清戦争後の東アジア情勢

日本は、日清戦争によって朝鮮に対する清の影響力を排除することに成功した。しかし1895年の

閔妃殺害事件は、朝鮮における日本の立場を決定的に悪化させた。さらに翌1896年には、朝鮮国王高宗がロシア公使館へ避難し、日清戦争中に日本の後押しで成立した政権が崩壊した。こうして、朝鮮半島における日本の影響力は大きく後退し、かわってロシアが進出することとなった。

列強の中国分割 ドイツは山東半島、フランスは広州地方、イギリスは長江沿岸がその勢力範囲であった。ロシアはすでに1896年に東清鉄道の敷設権を獲得し、1898年には旅順・大連の租借権と東清鉄道の南部支線の敷設権も獲得して、満州(中国東北部)を勢力範囲とした。日本も利権獲得競争に加わろうとしたが、台湾対岸部の福建省を他国へ割譲しないことを清朝に承認させるにとどまった。

- ▶ 1 台湾総督による命令は「律令」といった。
- ▶ 2 日本の三浦梧楼(1846~1926)公使が朝鮮在住の日本人社士とはかって日本軍を漢城(現在のソウル)の王宮に入れ、国王高宗である閔妃(明成皇后)を殺害した。閔妃は、閔氏一族の中心的存在。甲申政変のあとは大院君をしりぞけて対清協調路線をとり、日本が三国干渉に屈すると、親露政策に転じて、親日勢力を王宮から追放するなどして政権をにぎっていた。



そのころ、中国では新しい事態が展開していた。ヨーロッパ列強が、日清戦争の敗北で清が弱体化しているとみて、中国分割のうごきを進めたのである。列強は、中国各地でそれぞれ勢力範囲を設定していった。

一方アメリカは、1898年にハワイを併合し、フィリピンを領有するなど、極東への進出をはじめた。翌1899年には、国務長官ジョン=ヘイが中国の門戸開放宣言を發し、ヨーロッパ列強による中国分割のうごきを牽制した。

義和団戦争と日英同盟

列強による中国分割が進展すると、中国では排外主義的な民衆運動がおこった。1898年ころから、

義和団による清朝政府への反乱やイギリス人殺害事件などが発生し、その運動はますます盛んとなった。1900年、「扶清滅洋」を唱えて、義和団が北京の列国公使館を包囲すると、清朝政府もそれに便乗して列国に宣戦布告した。そこで、イギリス・アメリカ・フランス・ロシア・ドイツ・イタリア・オーストリア・日本の8か国は、共同で公使館救出にあたるために軍隊の派遣にふみ切り、義和団を鎮圧した(義和団戦争)。翌年、北京議定書が結ばれ、列国は清朝に巨額の賠償金を課し、守備兵の北京駐屯権などを認めさせた。

ロシアは北京への連合軍派遣に加わるとともに、義和団が波及したとして満州(中国東北部)にも出兵した。このことは日本政府の態度を硬化させた。第1次桂太郎内閣の小村寿太郎外相はイギリスとの同盟交渉を進め、1902年に第1次日英同盟が締結された。さらに、1903年8月から、日露間でその勢力範囲を線引きする日露協商締結の交渉が開始された。日本は、満州をロシアの勢力範囲、韓国を日本の勢力範囲とする満韓交換を提案したが、まともならず、1904年2月に日露交渉は失敗に終わった。



中国を取り巻く列強(ビゴー筆、『ル=リール』1901年3月30日号)

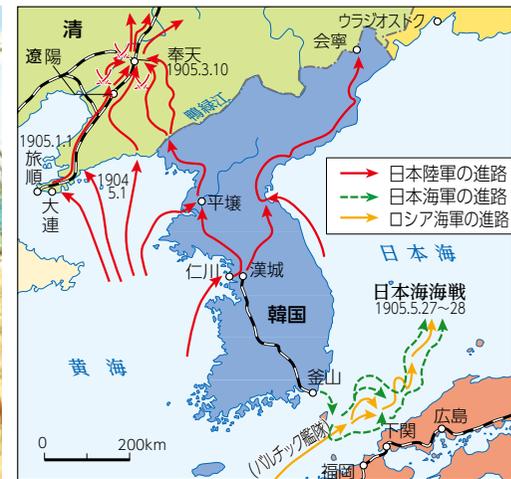
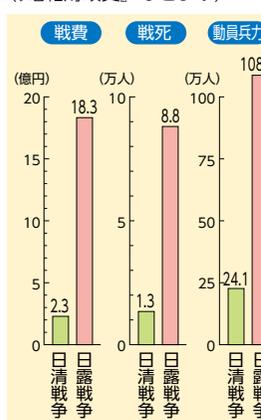
- ▶ 3 港湾都市の租借権、鉄道の敷設権、鉱山の採掘権などを得ていった。
- ▶ 4 清・韓両国における権益をたがいに承認することや、日・英のいずれかが第三国と戦う場合には、たがいに中立を守り、相手が複数の場合には日・英側で参戦することなどの規定がもりこまれた。
- ▶ 5 1897年に朝鮮は国号を大韓帝国に改め、国王も皇帝に改めた。
- ▶ 6 1903年以降、国家主義団体の対露同志会が開戦を主張し、同年、東京大学の戸水寛人(1861~1935)ら7人の博士も、桂首相などに対露強硬論(七博士意見書)を提出した。



「三笠」艦橋の東郷平八郎
日本海海戦直前の戦艦三笠の艦橋の様子を描いている。画面中央が東郷平八郎(1847~1934)、右から3人目が作戦担当の参謀秋山真之(1868~1918)。(東城鉦太郎画「三笠艦橋の図」、記念艦三笠蔵)

▶1 日清戦争を「義戦」とした内村鑑三は下関条約の内容をみて、朝鮮の独立確保が日本の進出の口実にすぎないことを知り、以後、「戦争の利益は強盗の利益である」として、戦争の絶対的廃止を説いた。

日清・日露戦争の比較
『昭和財政史』などより



日露戦争要図

70 日露戦争はどのような戦争だったのか

日露戦争

1904年2月8日、日本軍は韓国の仁川や中国の旅順でロシア艦隊を攻撃し、日露戦争がはじまった。日本軍はたちまち朝鮮半島のほとんどを占領すると、韓国・中国の国境をこえて満州に進撃して、後退するロシア軍を追って北上した。

開戦前、国民は、世界最強の陸軍国と思われていたロシアと戦うことに強いおそれと緊張感をもった。しかし、開戦後の連戦連勝の報道によって、緊張感は熱狂へとかわった。祝勝会や提灯行列が全国各地でおこなわれた。動員兵士数は日清戦争にくらべてはるかに多く、約100万人にもおよんだ。こうしたなか、幸徳秋水・堺利彦ら社会主義者は『平民新聞』で反戦論を展開し、キリスト者の内村鑑三も非戦論を主張した。また、与謝野晶子や大塚楠緒子は、詩などで反戦・非戦の情をうたったが、これらの声は国民の戦勝感によってかき消されがちであった。

日露戦争では、18億3000万円という多額の戦費を必要とした。桂太郎内閣は内債で6億4000万円を募集したが、それでもならず、外債7億円を同盟国のイギリスや好意的中立を保つアメリカで募集した。また、大幅な増税をおこなったため、消費者物価が高騰した。

日本軍は、多数の死傷者を出しながら旅順を陥落させ、1905年3月に奉天(現在の瀋陽)を占領した。さらに、同年5月、ヨーロッパ方面から回航されてきたロシアのバルチック艦隊を日本海海戦で破った。

日比谷焼き打ち事件

日本は兵員・兵器の補給や戦費調達のため限界に達し、ロシアも国内に革命状況をかかえ、ともに戦争を続けられる状況ではなかった。アメリカ大統領セオドア・ローズ



愛媛県松山のロシア人捕虜収容所

ああ増税 元老・御用商人などは、日露戦争によって行賞を得たが、一般国民は、「増税」という行賞しか得られなかったという風刺。(『東京パック』明治41年5月20日号)

ヴェルトの斡旋で、アメリカのポーツマスで日本とロシアの講和会議が開かれ、1905年9月、日本全権小村寿太郎とロシア全権ウイッテの間で講和条約が結ばれた(ポーツマス条約)。その内容は、ロシアは(1)日本の韓国に対する指導・保護・監理措置を認める、(2)清朝政府の承認を条件に、旅順・大連の租借権と東清鉄道南部支線(長春-大連・旅順間)を日本へ譲渡する、(3)北緯50度以南の南樺太を日本へ割譲する、(4)沿海州・カムチャツカ半島における日本の漁業権を承認する、というものであった。

増税や物価高に苦しんでいた民衆は、高揚した戦勝感のなか、賠償金の獲得を強く求めていた。しかし、ポーツマス条約で賠償金が得られないことがわかると、東京の日比谷公園で開かれた講和問題同志連合会主催の国民大会に、数万人の民衆が詰めかけた。さらに民衆と警官との乱闘をきっかけに東京全市で暴動がおこり、内相官邸や警察署・派出所、キリスト教会などが破壊された(日比谷焼き打ち事件)。警察だけでは収拾不能と判断した桂内閣は戒厳令を施行し、軍隊を出動させた。

日露戦争における日本の勝利は、インドやヴェトナムなど、西欧列強の植民地であったアジアなどの諸民族に刺激をあたえ、民族運動が活発化した。しかし、日本自体は、アジアの諸民族の期待を裏切って、新しい帝国主義国としてアジア諸民族にのぞむことになる。

日本の満州進出

1906年、日本は、関東州を統治するために旅順に関東都督府を設置し、一般行政と警察を担当させた。関東都督には現役陸軍大将・中将が任命され、旅順-大連-長春間の鉄道を守備するため、軍隊を指揮下においた。また同年、旅順-長春間の鉄道を経営する機関として、南満州鉄道株式会社(満鉄)が設立された。この満鉄は、総裁・副総裁が天皇の勅裁を経て政府によって任命される国策会社であった。満鉄は、満州産の大豆など、農産物を輸送するだけでなく、撫順・煙台の石炭採掘業や水運業・電気業、鉄道付属地内の土木・教育・衛生に関する行政もおこなった。

▶2 与謝野晶子は雑誌『明星』(1904年9月号)で戦地にいる弟を嘆いて「君死にたまふこと勿れ」と題する反戦詩を、大塚楠緒子は雑誌『太陽』(1905年1月号)で戦地の夫を思う妻の心情を詩にした「お百度詣で」を発表し、注目を集めた。

▶3 日露戦争後、戦没者を英霊としてまつた忠魂碑が、日本各地の小学校の校庭や神社の境内などに多数建設された。

▶4 ポーツマス条約で、日本はロシアが清から獲得した満州における権益を譲渡されたが、これには、清朝政府の承認という条件があった。そこで日本は、1905年末にその権益の譲渡を清朝政府に認めさせた。ポーツマス条約でロシアから受け継いだ遼東半島の日本の租借地は、万里の長城の東端の山海関以東にあたるために、関東州とよばれるようになった。

日比谷焼き打ち事件 市街電車を焼き打ちする民衆。



女性の歴史 4 製糸業と工女

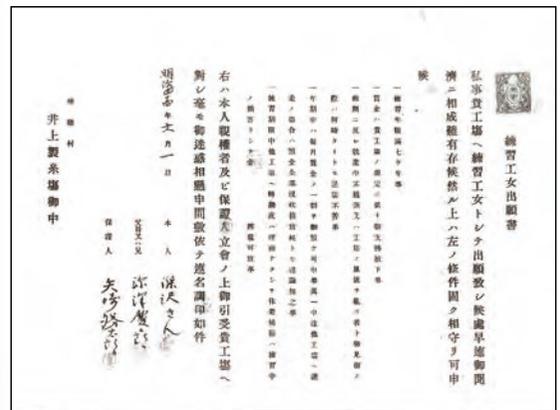
工女をめぐる評価

2014 (平成 26) 年 6 月、群馬県の富岡製糸場は、周辺市町の数施設とともに、「富岡製糸場と絹産業遺産群」としてユネスコの世界遺産に登録された。日本の近代化を進めたのみならず、国際的な技術交流と技術革新により、絹産業の発展に貢献した価値を認められてのことである。そして、その技術の国内への伝播をになったのは、官営模範工場としての富岡で技術を学び、帰郷していった若き工女たちだった。

山本茂美の『あゝ野麦峠』は、農村の貧困を背景に、岐阜から長野へ危険な雪の峠をこえて出稼ぎに出た、製糸工女たちのさまざまな苦労や悲劇を描き出している。絹産業を通じて日本の近代化を支えた工女たちの実態はどのようなものであったのだろうか。

近代化を支えた女性たち

富岡製糸場では、「西洋人は血をとりあぶらをしばる」とのうわさから、開業当初は工女の募集に苦戦した。応募したのは士族や上層農民の娘たちで、10代から20代の若さであった。工女の一人であった長野県の松代出身の和田英は、『富岡日記』にレンガ造りの製糸場の姿をはじめてみたときの感動や、皇太后・皇后による視察のようす、製糸場での技術習得のようすを生き生きと描いた。彼女は、製糸場での生活を終え、同僚とともに車を連ねて故郷に凱旋した際には、道々に見物人がかけつけるほどであり、村の人々には羽織袴の礼服で出迎えられ、「殿様のお通りの時のような有様でありました」と記している。当時どれだけ



▲ 優等工員 撮影用に白エプロンと化粧をしている。

の期待をもって富岡へ工女らが送られたかがわかる描写である。郷里に戻った工女らの伝えた技術は、その後長野野を製糸業の中心地として発展させていった。

工女の労働環境

産業革命を経た製糸産業の発展は、しだいに工女たちの労働環境を変化させていった。工女たちの多くは製糸工場の寄宿舎で暮らした。大学の医科教員だった石原修によると、工場法施行前は、十分な採光もない部屋で、工女一人あたり一畳の広さに、一つの布団を二人で分け合って寝る状況だったという。不衛生な環境は、吸血昆虫のシラミを発生させた。また、1日16時間をこえる工場もあったという過酷な労働条件もあり、結核が蔓延する原因となった。石原は、『女工と結核』で、1910 (明治 43) 年だけで 5000 人の女工が、労働環境が原因で亡くなったと訴えた。工場法施行はこういった労働環境の改善を目的としたものであったが、繊維業界の強い抵抗によって法律の抜け道も多く、根本的な解決にはならなかった。

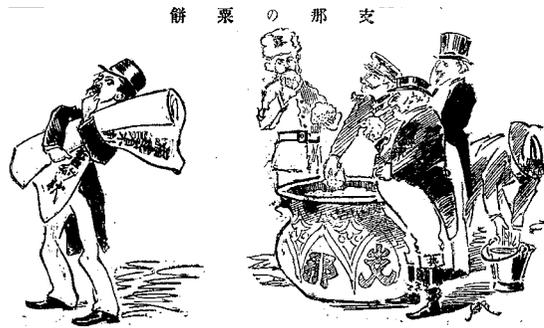
製糸業に対して紡績業では、原料の綿花の多くを輸入に頼っていた。そのため、安い費用で生産するために、昼夜二交代制で深夜業が課され、細井和喜蔵が『女工哀史』で描き出したように、紡績女工の労働環境もまた犠牲とされることが多かった。

『あゝ野麦峠』には、「男軍人女は工女 糸をひくのも国のため」という歌が紹介されている。日本は「糸で軍艦を買った」といわれるように、列強に追いつくことをめざした日本の急速な近代化に、工女たちの果たした役割が大きいことは事実といえるだろう。

◀ 女工の契約書 具体的な賃金は明記されておらず、賃金の1割を工場に納めることなどが取り決められている。

もっと知りたい 日本史 11

近代漫画の先駆者北沢楽天



▲ 「支那の餅栗」 『時事新報』にはじめて掲載された楽天の風刺画。日清戦争後、ロシアやイギリスなどの列強が中国の土地(粟)をつかみどりしているのに対し、日本は「福建省不割譲の誓約状」を大事に抱えているだけで手も足も出ず、負け惜しみを言っているようすが描かれている。このような風刺画はボックス社時代にも描いていたが、社主がアメリカ人だったため掲載されず、楽天が時事新報社に移るきっかけとなった。(『時事新報』第5508号、1899年4月1日)

福沢諭吉と北沢楽天

1899 (明治 32) 年、福沢諭吉は自らが創立した時事新報社に、北沢楽天を絵画担当の記者として高給で招いた。

北沢楽天 (本名は保次) は、1876 年埼玉県の大宮に生まれ、19 歳のとき、横浜外国人居留館で英字週刊誌を発行するボックス・オブ・キュリオス社で漫画を描いていたオーストラリア出身の漫画家フランク・ナンキベルに西洋漫画の画法を学んだ。そして、ナンキベルが渡米したのち、ボックス社に入社し時事風刺画を描いていた。こうした活躍を福沢は見逃さなかったのである。

1902 年、『時事新報』紙上に創設された日曜特集欄は「時事漫画」と命名され、楽天が主筆となった。「漫画」という言葉は、英語の cartoon を訳した和語で、単純な手法で滑稽を描いたものという意味であった。



◀ 北沢楽天 (1876~1955)

1921 (大正 10) 年、「時事漫画」は、『時事新報』の日曜版として独立し、政治風刺だけでなく、女性や子ども向けの漫画も掲載して広範に読者を獲得、同時に「漫画」という言葉も浸透していった。

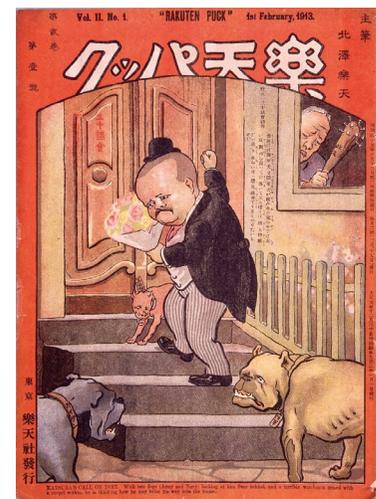
漫画雑誌『東京パック』の創刊

1905 年 4 月 15 日、楽天は日本初のカラー漫画雑誌『東京パック』を創刊した。B4 判の大型誌面、全 12 ページ (翌年から 16 ページ)、石版カラー印刷に加え、全ページ漫画という大胆なアイデアが人々を魅了した。藩閥政府や警察などの権力を、「漫画」という表現方法で鋭く批判して爆発的な人気を博した。定価は 1 部 12 銭 (1906 年から 13 銭)、はじめは月刊であったが、1906 年から月 2 回 (1907 年には 10 日に 1 回の旬刊) となって発行部数をのばした。

近代漫画の先駆者として

1912 年、東京パック社を退社した楽天は、新たに楽天社を設立、『東京パック』にそっくりな『楽天パック』と、新聞の家庭欄のような婦人や子どもを対象とした『家庭パック』を創刊した。

楽天は、「ポンチ絵」や「おどけ絵」とよばれ、低俗で評価の低かった滑稽画を、近代風刺漫画として確立した。楽天によって日本ではじめて漫画家という職業が誕生したのである。



◀ 「近來味噌をつけ たる人」 桂太郎・山縣有朋・大隈重信・寺内正毅ら「男を下げた」政治家たちが描かれている。(『楽天パック』第 2 巻第 1 号表紙、1913 年 2 月 1 日)



桂太郎 長州藩出身。ドイツ留学後、山県有朋のもとで陸軍の整備につくし、台湾総督や陸相を歴任した。



西園寺公望 文相や外相、枢密院議長などを歴任し、立憲政友会総裁となる。松方正義死後は「最後の元老」として天皇に首相の推薦や政務の助言などをおこなった。

▶1 第1次西園寺内閣は、戦後の一時的な好況を背景として、増税に加え、軍備拡張、官営八幡製鉄所の拡充、鉄道の国有化などの政策を打ち出した(→p.185)。

元老	勅令(命)年月日	死亡年月日
黒田 清隆	1889.11. 1	1900. 8.25
伊藤 博文	1889.11. 1	1909.10.26
山県 有朋	1891. 5. 6	1922. 2. 1
松方 正義	1898. 1.12	1924. 7. 2
井上 馨	1904. 2.18	1915. 9. 1
西郷 従道	なし	1902. 7.18
大山 巖	1912. 8.13	1916. 2.10
西園寺公望	1912.12.21	1940.11.24
桂 太郎	1913. 2.22	1913.10.10

元老と在任期間 元老は、天皇に終身まで命じられて、法律の枠をこえて天皇を補佐し、後継首相の選任や重要政務の決定に影響をもった。政党勢力の伸張とともにその影響力は後退した。昭和戦前期には首相選定の権限は天皇側近の重臣に移っていった。

76 日露戦争後の政治はどのように推移したのか

桂園時代

日露戦争後は、伊藤博文・山県有朋ら明治の元勳が政界の第一線からしりぞき、元老として背後から国政をうごかす一方で、立憲政友会に代表される政党が、官僚閥や陸海軍と対立や妥協をしながら、元老政治を排除して、しだいに成長していった。また、日露講和反対の運動に象徴されるように、民衆の要求や世論も無視できない影響力をもちはじめた。

第4次伊藤博文内閣の退陣以後は、陸軍長州閥の桂太郎を中心とした官僚勢力や貴族院と、伊藤の後継として西園寺公望が総裁に就任した立憲政友会が政界の勢力を二分することになった。1906年1月、西園寺が桂にかわって内閣を組織し、以後、桂と西園寺が交互に政権を担当した。この第1次桂内閣の成立(1901年)から第3次桂内閣の総辞職(1913年)までの時期を桂園時代という。

第1次西園寺内閣は、日露戦争後の財政難を乗り切るため、政友会の基本路線でもある積極政策を進めた。しかし、積極政策は1907年の恐慌と減税の要求で行きづまり、翌1908年に第2次桂内閣にかわった。桂内閣は緊縮財政を進め、戊申詔書を発布して国民に勤勉儉約を説き、財政の立て直しに努めた。また、社会主義に比較的寛容であるとされた西園寺内閣に対して、桂内閣は社会主義運動や労働運動をきびしく取り締まった。

大正政変

大正天皇が即位した1912年、第2次西園寺内閣は、海軍拡張の要求を一部受け入れる一方で、緊縮財政の方針のもと、陸軍が辛亥革命を理由に朝鮮に設置するために要求した、二個師団の増設を拒否した。すると、陸軍大臣上原勇作は単独で天皇に辞表を提出し、陸軍から後任を得られなかった西園寺内閣は総辞職した。

このあと、桂が陸軍と長州閥の支持を得て、第3次桂内閣を組織した。

世論は、第2次西園寺内閣の退陣が桂によるものとみて批判し、さらに内大臣として政界を離れ、宮中にいた桂が組閣したことに強く反発した。第3次桂内閣への批判は「憲政擁護、閣族打破」をスローガンに掲げた倒閣運動に発展した。この運動は、新聞・雑誌記者を先頭に、立憲政友会の尾崎行雄や立憲国民党の犬養毅らを中心として進められ、全国的な国民運動となった(第1次護憲運動)。

1913年2月、数万の民衆が議事堂を取り囲んで政府寄りの新聞社や警視庁を襲撃し、軍隊が出動する事態となって、第3次桂太郎内閣はわずか53日で総辞職した。このできごとは大正政変とよばれる。民衆の運動が内閣を倒す要因になったのは、憲政史上はじめてのことであった。

政変後の政治

日露戦争後、国際的地位が上昇したという意識や、大正という新時代への期待も背景として、第1次護憲運動の前後から、自由主義・民主主義的な意識がめばえ、国民の間に政治に対する自覚が高まった。しかし、国民の意向に反して、政党政治の実現には時間がかかった。桂の辞職をうけて首相になったのは、薩摩出身で海軍長老の山本権兵衛であった。山本内閣は、政友会を与党とし、行財政整理をおこない、1914年、軍部大臣現役武官制を改めて対象を予備役・後備役に拡大するなど、政党勢力への配慮に努めた。しかし、軍艦購入をめぐる汚職事件(ジーマンス事件)がおきると、ふたたび民衆が議会を取り囲む事態となり、政党政治に抵抗する貴族院によって退陣に追いこまれた。

元老は、政友会の勢力拡大をおさえ、護憲運動以来の閥族批判をかわすねらいもあって、国民に人気のある大隈重信を首相に起用した。1914年に成立した第2次大隈内閣は、立憲同志会を与党として総裁加藤高明を外相に任じ、第一次世界大戦に参戦した。

1916年、第2次大隈内閣にかわった寺内正毅内閣は「挙国一致」を掲げたが、実際は政友会が協力をする体制をとっていた。寺内内閣の成立に対して、野党となった同志会は小政党を引きこんで憲政会を結成し、政友会と憲政会の二大政党が政界を二分する構図ができあがった。



ジーマンス事件の風刺画 海軍高官がドイツのジーマンス社やイギリスのヴィッカーズ社から賄賂を受け取ったことが明らかとなった事件。山本自身は関与していなかった。背景にはイギリス・ドイツを中心とした世界的な軍艦建造競争があった。(『東京パック』1914年2月)

史料

尾崎行雄の内閣弾劾演説

(衆議院議事速記録、「官報」号外)

彼等ハ常ニ口ヲ開ケバ直ニ忠愛ヲ唱ヘ、恰モ忠君愛國ハ自分ノ一手専売ノ如ク唱ヘテアリマスルガ、其為ストコロラ見レバ、常ニ玉座ノ蔭ニ隠レテ、政敵ヲ狙撃スルガ如キ挙動ヲ執ツテ居ルノデアル、(拍手起ル) 彼等ハ玉座ヲ以テ胸壁トナシ、詔勅ヲ以テ弾丸ニ代ヘテ政敵ヲ倒サントスルモノデハナイカ、…(一九一三年二月五日)

▶2 軍部は1907年に策定された「帝国国防方針」にもとづく兵力の充実をめざした。師団は軍隊の編成単位で、平時は約1万人、戦時は約2万5000人の規模になる。

▶3 桂は、立憲国民党の一部の協力を得て、新党を結成して政界の再編成をはかるとともに、勅語を利用して政府批判をおさそうとした。しかし、この対応が政友会の反発を生んだ。新党は、桂の死後に官僚出身の加藤高明を総裁として本格的に活動を開始した(立憲同志会)。

▶4 同志会は大隈の人気やメディアを利用して選挙で政友会に大勝し、大隈内閣は懸案であった二個師団の増設を実現した。



ヨーロッパの戦場で使われた戦車(タンク) 第一次世界大戦で登場した新兵器の一つである。このほか、軍用飛行機、毒ガスなども戦争に使用され、犠牲者が拡大した。(I.W.M所蔵)



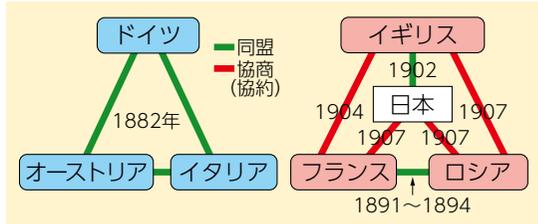
サラエボ事件 連行されるセルビア人青年(右から2人目)。

▶1 1914年、ボスニアの州都サラエボを訪問したオーストリアの皇位継承者夫妻が、セルビア人青年に暗殺された事件。

▶2 戦場に対し、直接の戦闘行為に参加していない一般国民を指し、間接的な戦争参加を意識づけるのに用いられた言葉。

▶3 元老井上馨が日本の国運を発展させる「天佑」(天のたすけ)と表現したように、日本は極東におけるドイツの権益を奪取できる好機と考えた。

▶4 日本は占領した南洋諸島の行政をおこなうために、南洋庁を設置した。以後、南洋興発(製糖事業を主とする会社)などの民間資本と、沖縄県などからの移民が多数南洋諸島に渡った。



第一次世界大戦における国際関係 イタリアは三国同盟側であったが、領土問題でオーストリアと対立しており、第一次世界大戦では連合国側についていた。

77 日本はなぜ第一次世界大戦に参戦したのか

第一次世界大戦の勃発

イギリスとロシアは、植民地の獲得や勢力地域の伸張をめざして、長く世界的規模で争ってきたが、1907年に英露協商を結んだ。その結果、同時期に成立した英仏協商や日露・日仏協商とあわせて、イギリス・フランス・ロシア・日本がドイツを包囲する体制となった。こうしたなか1914年6月、諸民族が入り乱れていたため「ヨーロッパの火薬庫」とよばれたバルカン半島において、サラエボ事件がおこると、翌7月、イギリス・フランス・ロシアの連合国と、ドイツ・オーストリアとの間で**第一次世界大戦**がはじまった。

戦争はアジアへも飛び火し、各国が植民地から兵士を動員するなどして、戦場はグローバル化した。相手国の都市も空襲したために、戦闘員・非戦闘員の区別があいまいとなり、女性も「銃後」の戦いに参加するなど、戦争は**総力戦**となった。

日本の参戦

第一次世界大戦がヨーロッパではじまると、日本に参戦する義務はなかったにもかかわらず、第2次大隈重信内閣は日英同盟を理由として参戦にふみ切った。1914年8月、ドイツに宣戦布告したあと、日本軍は中国山東省の青島と、赤道以北のドイツ領南洋諸島を占領した。しかしそののち、日本は実質的にはほとんど戦闘行為に加わらなかったため、総力戦体制の構築が遅れることになった。そのことは、1920年代に軍が総力戦体制構築のための国内改造を企図する原因ともなった。

第一次世界大戦下の日本外交

第一次世界大戦が勃発すると、ヨーロッパの列強が中国をかえりみるゆとりがないことに乗じて、日本は1915年1月、中国の袁世凱政府に**二十一か条の要求**をつきつけた。この要求は中国の反発とアメリカの不信感を招いたが、5月、日本は中国に最後通牒を発して、第5号を除く16か条を承認させた。中

史料 二十一か条の要求



二十一か条の要求を非難する中国のポスター 中国で発行されたポスターで、中国が鎖で縛られている。

第一号：
 第一条 支那国政府ハ、独逸国カ山東省ニ関シ条約其他ニ依リ支那国ニ対シテ有スル一切ノ権利、利益、讓与等ノ処分ニ付、日本国政府ヲ独逸国政府ト協定スヘキ一切ノ事項ヲ承認スヘキコトヲ約ス
 第二号 日本国政府及支那国政府ハ、支那国政府カ南滿州及東部内蒙古ニ於ケル日本国ノ優越ナル地位ヲ承認スルニヨリ、茲ニ左ノ條款ヲ締約セリ
 第一条 兩締約国ハ、旅順大連租借期限並南滿州及安奉兩鉄道各期限ヲ何レモ更ニ九十九ヶ年ツツ延長スヘキコトヲ約ス
 第二号 滿州権益の有効期限の九九年延長や、山東省ドイツ権益の日本による継承をもちこんだ第一、四号、中国中央政府での日本人顧問の雇用や警察の日中合同化といった内容をもりこんだ第五号から成り立っている。第五号のちに国際問題となり、日本が撤回した。
 第二号 ポーツマス条約でロシアから継承した権益は、いずれも一九一三年に満期となる予定であった。

国は承認した5月9日を「国恥記念日」として、以後も国民的な抗日運動をくり広げた。

そののち、大隈内閣は袁世凱を打倒しようと画策したが、大隈内閣のあとをうけた寺内正毅内閣は一転して、袁世凱の後継者である段祺瑞を中心とする北京政府を援助する政策にふみ切った。その一環として莫大な額の対中借款(西原借款)がおこなわれたが、のちにこの借款はこげつき、回収できなかった。

ヨーロッパ列強のうち、ロシアとは、1916年に**第4次日露協商**が結ばれ、同盟関係に入った。一方、日本の中国進出に批判的であったアメリカがドイツに対して、参戦して日本と同じ連合国となったため、1917年に**石井-ランシング協定**が結ばれた。この協定により、日本は中国における特殊権益をアメリカに認めさせることに成功した。

ロシア革命とシベリア出兵

第一次世界大戦中の1917年3月、ロシアで三月革命がおこり、帝政が廃止された。しかし、臨時政府は依然として戦争を継続したために、労働者・農民・兵士たちは不満をいだき、11月に臨時政府を打倒して、レーニンらボルシェヴィキ(ロシア社会民主労働党左派)が政権をにぎった(十一月革命)。それによって成立したソヴィエト政権は、ドイツと単独講和し、第一次世界大戦の戦線から離脱した。

ロシアの戦線離脱と、世界ではじめての社会主義国誕生に脅威をいだいた列強は、チェコ軍の捕虜救済を口実に、ロシア革命の干渉に乗り出した(シベリア出兵)。日本の寺内正毅内閣も、アメリカからのウラジオストクへの限定出兵提案に乗じて、1918年8月から東部シベリアへ全面出兵をおこなった。欧米列強の撤兵後も、日本は単独で1922年まで駐兵を続け、列強の不信感を高めた。

シベリア出兵 ウラジオストクのチェコ軍本部前を行進する日本軍。





北伐と山東出兵 清朝時代の終わりころから、中国では地方長官が軍事や民政・財政の権限をにぎり、一つの勢力圏をつくっていた。これを軍閥といい、辛亥革命後は軍事力を強めて各地に割拠していた。袁世凱の死後、軍閥間の抗争がはげしくなっていた。蔣介石はこれらの軍閥をおさえようと北伐を開始した。

山東出兵 1928年4月、山東省の青島に上陸した日本兵。



張作霖爆殺事件現場 カメラマンを待機させ、関東軍大尉が爆破スイッチをおした。



張作霖 満州の馬賊の頭目から出発し、1920ころには満州全域を支配する軍閥となった。



狙撃された浜口雄幸首相 1930年11月14日、ロンドン海軍軍縮条約締結を非難する右翼青年によって東京駅で狙撃され、重傷を負った。

84 昭和初期の外交はどのようにおこなわれたのか

幣原外交

1924年の第1次加藤高明内閣から1932年の犬養毅内閣にかけての政党内閣期に、憲政会と後身の立憲民政党が内閣を組織した際、外相を務めたのが、幣原喜重郎であった。

幣原外相による外交を幣原外交という。ワシントン会議の全権委員でもあった幣原は、ワシントン体制の理念に順応しようとし、アメリカ・イギリスに対しては協調主義をとった。また中国に対しても、経済重視の観点から内政不干渉の原則をとり、武力行使には慎重であった。

中国（中華民国）では、袁世凱の死後、軍閥が群雄割拠する状態となっていた。孫文は中国国民党を結成して国内統一を進めようとした。孫文の死後、後継者となった蔣介石は、1926年、国民革命軍総司令に就任して、北方軍閥への戦いをはじめた（北伐）。翌1927年、国民革命軍は南京を占領し、南京を首都として国民政府を樹立した。国民革命軍の南京入城の際、列国領事館が襲撃されたことから、日本はイギリスやアメリカから共同軍事行動を提案されたが、幣原は拒絶した。そのため、野党の政友会や、軍部・右翼などからは「軟弱外交」と非難された。

田中外交

若槻礼次郎内閣が退陣したあと、軍人から政党政治家に転身した田中義一を首相とする政友会内閣が成立した。田中内閣では首相自らが外相を兼任した（田中外交）。田中内閣もアメリカ・イギリスに対しては協調主義であり、1928年にパリ不戦条約に調印した。

田中外交が幣原外交と対照的であったのは、中国に対する方針においてであった。それまで日本は、満州権益を擁護するために満州軍閥の張作霖を長年支援していた。蔣介石の国民革命軍が北伐を再開して、北進を続け、山東省に近づくと、満州への波及を恐れた田中は、満州から



幣原喜重郎 大阪府出身。ワシントン会議の全権委員。



田中義一

▶1 英・仏・米・独・日など15か国（のち63か国）が調印、国家の政策手段としての戦争の放棄と国際紛争の平和的解決などを盛りこんだ。野党の立憲民政党はこの条約の中の「人民の名に於て」という字句が天皇大権を干犯するものだと、田中内閣を攻撃した。

北京に進出していた張作霖を守るために、日本人居留民の保護を名目として、3回にわたって中国山東省に出兵した（山東出兵）。とくに第2次山東出兵のときには、山東省都の済南で日本軍と国民革命軍が軍事衝突する事件がおこった（済南事件）。このため、中国では抗日運動が激化し、日本製品の不買運動が広く展開された。

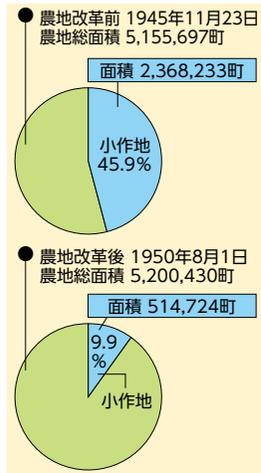
北伐がさらに進み、国民革命軍が北京にせまると、田中は張作霖を満州へ帰還させようとした。ところが現地の関東軍は、1928年6月、帰還途中の張作霖を奉天（現在の瀋陽）郊外で爆殺した（張作霖爆殺事件）。満州の日本権益の保持に危機感をいだく関東軍が、張作霖爆殺の混乱につけこんで軍を出動させ、満州を支配しようと計画しておこしたものである。この事件は、日本では「満州某重大事件」として真相は秘密にされたが、民政党の追及をうけ、また事件処理をめぐる昭和天皇に叱責されて田中内閣は総辞職した。

ロンドン海軍軍縮条約

ワシントン海軍軍縮条約は対象が主力艦のみであったことから、以後、アメリカ・イギリス・日本の間では補助艦の建艦競争が続いた。1927年、補助艦制限のため開かれたジュネーブ会議は、アメリカとイギリスの対立で失敗に終わった。

田中内閣のあとに成立した立憲民政党の浜口雄幸内閣では、幣原喜重郎がふたたび外相となった。浜口内閣は、補助艦制限のために1930年1月にロンドンで開かれた軍縮会議への参加を決め、結局、対米英協調の観点から、海軍軍令部の反対をおさえて、ロンドン海軍軍縮条約に調印した。

しかし、海軍軍令部や野党の政友会・枢密院・右翼は、浜口内閣による海軍軍縮条約の調印は、天皇の統帥権を干犯するとして強く非難した。浜口内閣は枢密院の反対をおし切って条約を批准したが、浜口首相は、条約に不満をもつ右翼青年によって東京駅で狙撃され、翌1931年に死去した。同年、同じ立憲民政党の第2次若槻内閣が成立した。



小作率の変化 第二次農地改革の結果、小作地を含む所有限度は、内地平均3町歩、北海道12町歩となった。山林は対象外。(『近現代日本経済史要覧』)

▶1 GHQによる戦後改革よりも、戦時中の経済統制や国民の総動員が社会福祉の充実や経済の合理化を進め、のちの高度経済成長を支えたとする見方もある。

▶2 山林は対象外とされ、山林地主が残った。自作農となった農民は、保守化して保守政党の基盤となった。また、農家の収入増は購買力の増加につながり、のちの高度成長期の国内市場形成にも大きな役割を果たした。

▶3 325社が指定されたが、占領政策の転換にともない、実際に分割されたのは日本製鉄・三菱重工業など11社のみであった。また、財閥解体において、財閥系銀行は解体されなかったため、以後経済再建の核となり、銀行を中心とした企業グループが形成された。



農地改革後の農村 農林省がつくった啓蒙用のポスター。(国立公文書館)



財閥の解体 帝国銀行から三井銀行の株券を運ぶ。

94 占領下の経済と政治はどのように推移したのか

経済の民主化

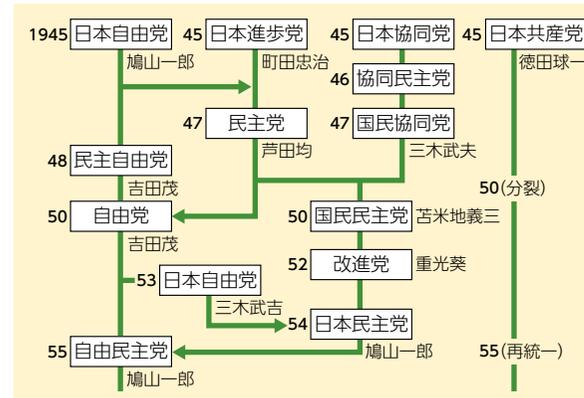
GHQは、寄生地主制や財閥の存在など、日本経済が封建的であり、それが軍国主義の温床となつたとして、改革を求めた。

1930年代には、昭和恐慌や総動員体制のもとで農村が動揺したため、自作農の養成や農村の再編のうごきが生まれた。しかし、寄生地主制と高率小作料から農民が解放されたのは戦後であった。幣原内閣のもとの**第一次農地改革**は不徹底であったため、GHQの批判をうけ、第1次吉田茂内閣は、1946年10月に自作農創設特別措置法を制定して、さらに改革を進めた(**第二次農地改革**)。在村地主の小作地を1町歩(北海道は4町歩)に制限し、これをこえる分と不在地主の全小作地を国が買収し、小作人に売却した。小作料は低額の金納とされた。農地改革によって寄生地主制は解体し、多くの自作農が生まれた。

GHQは、自由競争にもとづく経済体制をつくり出すために、1945年11月、三菱・三井・住友・安田など財閥の**資産凍結・解体**の指令を出した。翌年8月には**持株会社整理委員会**が発足し、指定した持株会社の解体、財閥家族による企業支配の排除がおこなわれ、株式も公開された。また、1947年には**独占禁止法**が成立し、7月、企業結合を監視する公正取引委員会が設置された。さらに12月には、**過度経済力集中排除法**が公布され、巨大独占企業の分割が進められた。

政党政治の復活

アジア太平洋戦争後、戦時中に翼賛政治会(のち大日本政治会)に参加した議員を中心に政党再結成のうごきがあらわれ、1945年、**日本進歩党**が結成された。また、翼賛政治会や東条内閣に批判的であった議員らは、**鳩山一郎**や**芦田均**を中心に反共産主義と自由主義を掲げて**日本自由党**を結成した。ほかに**日本社会党**が旧無産政党を統合、**片山哲**を書記長にして発足し、戦前は非合



戦後の政党の系譜 55年体制成立まで。

法とされた日本共産党も再建された。

占領期の政治は、GHQの占領政策下、食糧難や不況への対策を訴える社会運動の圧力のなかで、冷戦の開始などの国際情勢の影響もうけながらゆれうごいた。その結果、戦前の政党政治の基盤のうえに、当初は圧倒的な多数党が生まれず、自由党などの自由主義勢力や社会党・進歩党などの左派・中道勢力などが連立や分裂、統合をくり返した。

占領期の政治

1946年4月、戦後初の総選挙がおこなわれ、日本自由党が第一党となった。しかし、選挙直前に日本共産党を除く各政党から大量の公職追放者を出したことや、大選挙区制を採用したこともあって、過半数をとることができなかった。選挙後には鳩山一郎が公職追放となつて、新たに日本自由党の党首となつた**吉田茂**が幣原の退陣をうけ、進歩党との連立によって内閣を組織した。

新憲法の制定や農地改革を進めた第1次吉田内閣に対し、経済政策に反発する労働運動がもりあがり、新憲法公布後の1947年におこなわれた総選挙では、自由党が敗北した。吉田内閣にかわつて、選挙で躍進し、第一党となつた社会党の**片山哲**が、民主党(進歩党が再編された)に国民協同党を加えた3党の連立内閣を組織した。片山内閣は労働省の設置を実現し、統制による経済の安定をめざしたが、**炭鉱国家管理問題**や予算をめぐる内部対立が表面化して、半年あまりで総辞職した。

1948年3月には片山内閣と同じ3党の連立で、民主党の**芦田均**が内閣を組織した。しかし、芦田内閣は**昭和電工事件**で倒れ、左派・中道内閣は政権を長く維持することができなかった。10月には第2次吉田内閣が誕生し、左派・中道連立政権への不満を追い風に、翌年1月の総選挙で与党の民主自由党が戦後初の過半数政党となった。こうして、多数党を与党とした吉田内閣が、冷戦を背景に転換するアメリカの対日政策のいない手となつていった。



不正官僚摘発と民主主義擁護を求める大会 化学工業会社昭和電工への復興金融金庫からの多額融資にからんで、政治家への献金・贈賄があったという疑惑(昭和電工事件)に対して開催された。1948年10月23日、東京の日比谷公園。



芦田均 外交官から議員へ転じ、戦後は幣原内閣の厚相を務めた。日本自由党創立に参加したが脱党、民主党総裁となった。



片山哲 キリスト教的な社会主義を主張し、斎藤隆夫の議員除名(→p. 224)に反対して社会大衆党を除名された。1960年に結成された民主社会党の最高顧問を務めた。

▶4 1947年の総選挙は、中選挙区制がとられた。

▶5 社会党政権誕生の背景には、吉田内閣の政策に反発した労働運動の高揚や、GHQによる中道政権への期待があった。



吉田茂 外務次官・駐英大使などを歴任。1946年5月から54年12月までの間、日本自由党・民主自由党・自由党総裁を務め、5次にわたって内閣を組織するなど、戦後の日本の政治を主導した。

▶1 憲法第9条に違反するとの違憲論が強かったが、政府は自衛のための実力は否定していないとして合憲論を展開し、防衛力整備計画を進めた。

▶2 「義務教育諸学校における教育の政治的中立の確保に関する臨時措置法」、「教育公務員特例法の一部改正法」の2法。教職員組合の全国連合体として1947年6月に結成された日本教職員組合（日教組）は反対闘争を続けた。

98 独立後の政治はどのように推移したのか

安保体制

サンフランシスコ平和条約の調印と同じ1951年9月8日、日米安全保障条約（安保条約）が調印され、アメリカ軍が引き続き日本に駐留することになった。駐留軍は、極東の平和と安全の維持に必要な場合、大規模な内乱・騒擾の鎮圧のために日本政府の要請があった場合、外部からの武力攻撃が加えられた場合に出兵できるとされたが、アメリカの日本防衛義務はなく、軍事同盟としては片務的であった。安保条約にもとづき、1952年2月、日米行政協定が国会の承認を得ないまま調印され、日本は駐留軍施設を無償で提供し駐留経費を分担するなど、日本側に不利な条項が決められた。この結果、日本は極東におけるアメリカの反共的な集団安全保障機構の一環を構成することになった。

吉田茂内閣は、平和条約の発効する1952年4月に海上警備隊を新設し、7月には保安庁を発足させ、警察予備隊を保安隊と改称した。また、アメリカ軍からの防衛力増強の要求にそって、1954年3月に日米相互防衛援助協定（MSA協定）を結び、アメリカから軍事・経済援助をうけるとともに、自衛力増強の義務を負った。さらに7月、保安庁を改組して防衛庁とし、この統括下に直接・間接の侵略への防衛と公共の治安維持を任務とする陸・海・空の自衛隊を設置した。

国内の治安体制と教育政策

政府は、占領の終了が秩序の混乱をもたらさないように、国内の治安体制の強化を進めた。1952年、吉田内閣は、「血のメーデー事件」をきっかけに、暴力的破壊活動をおこなった団体の取り締まりを規定した破壊活動防止法を制定した。

史料 日米安全保障条約

第一条 平和条約及びこの条約の効力発生と同時に、アメリカ合衆国の陸軍、空軍及び海軍を日本国内及びその付近に配備する権利を、日本国は、許与し、アメリカ合衆国は、これを受諾する。この軍隊は、極東における国際の平和と安全の維持に寄与し、並びに、一又は二以上の外部の国による教唆又は干渉によつて引き起された日本国における大規模の内乱及び騒擾を鎮圧するため日本国政府の明示の要請に応じて与えられる援助を含めて、外部からの武力攻撃に対する日本国の安全に寄与するために使用することができる。

第二条 第一条に掲げる権利が行使される間は、日本国は、アメリカ合衆国の事前の同意なくして、基地、基地における若しくは基地に関する権利、権力若しくは権能、駐兵若しくは演習の権利又は陸軍、空軍若しくは海軍の通過の権利を第三国に許与しない。

☐日本側全権は吉田茂首相、前文と五条よりなる。



「血のメーデー事件」 1952年5月1日のメーデーのとき、使用不許可とされた皇居前広場で、デモ隊と警察官が衝突して多数の死傷者を出した事件。皇居前広場事件ともいう。



第1回原水爆禁止世界大会（1955年8月6日、広島市） 東京都杉並区の主婦たちのよびかけで、約1年間に3000万人をこえる原水爆禁止署名が集められ、世界の世論をうごかした。全世界でも6億7000万あまりの署名が集まったことが報告された。



砂川事件 1955年の測量開始後、東京都の砂川町（現在の立川市内）で、市民・労働組合員・学生らが米軍立川基地の拡張に反対した闘争で、安保条約と憲法をめぐる裁判となった。1959年3月の東京地裁での判決では、米軍駐留・安保条約は憲法違反としたが、同年12月の最高裁判決では、外国軍駐留は憲法にいう戦力ではなく、安保条約は裁判所の違憲立法審査権の範囲外として、原判決を破棄、東京地裁に差しもどした。



第五福竜丸 1954年、焼津のマグロ漁船第五福竜丸が中部太平洋ビキニ環礁でおこなわれたアメリカの水爆実験による放射線の灰（死の灰）を浴び、一人が死亡した（第五福竜丸事件）。第五福竜丸は、今も東京都の夢の島に保存されている。

教育の分野でも国家の統制を強めた。1954年には教育二法が公布され、教職員の政治教育や政治活動が抑制された。さらに、1956年、鳩山一郎内閣は新教育委員会法を公布し、教育委員を公選から自治体の首長による任命制とした。

平和運動の高まり

こうしたうごきに危機感をいだいた社会党・共産党・日本労働組合総評議会（総評）などの革新勢力は、吉田内閣による一連の政策を、占領改革の成果を否定する「逆コース」とよんで反対し、憲法擁護、再軍備反対、アメリカ軍基地反対などを主張する組織的な平和運動を展開した。

1952年にはじまった石川県内灘村（現在の内灘町）におけるアメリカ軍試射場反対運動（内灘事件）を先がけに、1950年代には立川米軍基地拡張反対運動（砂川事件）、富士山麓基地反対闘争などの基地反対闘争が続いた。また、1954年の第五福竜丸事件を契機に、東京都杉並区の主婦たちがはじめた原水爆禁止運動がもととなって、翌1955年8月には広島で第1回原水爆禁止世界大会が開催された。

1950年代には労働運動も活発で、産業別組合（単産）が毎年3月ごろに共同歩調で賃上げを要求する統一行動（春闘）もおこなわれ、1956年から総評の指導で定着した。エネルギー革命の進展により斜陽化しつつあった石炭産業の職場闘争は激烈で、三井鉱山三池炭鉱所では1959年から翌年にかけて合理化反対の争議がくり返された（三井三池炭鉱争議）。しかし、総評の支援のもと強硬な方針をとった組合側が敗れ、労働運動は労使協調路線へと転換した。

史料 杉並アピール（一九五四年五月）

全国民の署名運動で水爆禁止を全世界に訴えましょう。杉並区を中心に水爆禁止の署名運動をおこし、これをさらに全国民の署名運動にまで発展させましょう。そしてこの署名にはつきりと示された全国民の決意にもとづいて、水爆そのほか一切の原子力兵器の製造・使用・実験の禁止を全世界に訴えましょう。



社会党の統一 (1955年10月13日)



【保守合同】(1955年11月15日) 自由民主党の結成大会。



日本の国連加盟を報道する新聞(1956年12月19日付) 国連総会で加盟受諾演説をおこなった重光葵外相は、日本は「東西の架け橋になりうる」と宣言した。

史料 日ソ共同宣言

1 日本国とソヴィエト社会主義共和国連邦との間の戦争状態は、この宣言が効力を生ずる日に終了し、両国の間に平和及び友好善隣関係が回復される。

9 日本国及びソヴィエト社会主義共和国連邦は、両国間に正常な外交関係が回復された後、平和条約の締結に関する交渉を継続することに同意する。

ソヴィエト社会主義共和国連邦は、日本国の要望にこたえかつ日本国の利益を考慮して、歯舞群島及び色丹島を日本国に引き渡すことに同意する。ただし、これらの諸島は、日本国とソヴィエト社会主義共和国連邦との間の平和条約が締結された後に現実に引き渡されるものとする。

☐平和条約は現在も締結されていない。

99 55年体制はなぜ成立したのか

「雪解け」と第三勢力

1955年7月、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連4か国の首脳会談が第二次世界大戦後をはじめ開かれ(ジュネーブ四巨頭会談)、冷戦下における軍事的な対立や緊張を緩和するうごきが生まれた(「雪解け」)。

ソ連では、スターリンの死後、第一書記に就任したフルシチョフが東西平和共存路線を唱え、1959年に訪米してアイゼンハワー大統領と首脳会談をおこない、米ソ両国はしだいに「雪解け」を反映した共存路線へと傾斜していった。

「雪解け」のムードのなか、かつて欧米の植民地として支配されていたアジア・アフリカ諸国も第三勢力として存在感を増していった。アジアでは、インドのネルー首相を中心に、新たに独立した国々の団結と東西両陣営に属さない非同盟主義とよばれるうごきが強まった。1955年4月、インド・中国・エジプトなど29か国首脳がインドネシアのバンドンでアジア・アフリカ会議を開き、世界平和と協力の促進に関する宣言を採択し、反植民地主義・民族自決・完全独立など平和十原則を決議した。

55年体制

1954年11月、岸信介・石橋湛山ら自由党の反吉田茂勢力や、改進黨・日本自由党などが合流して日本民主党が結成された。12月、吉田茂内閣が総辞職すると、かわって、憲法改正と再軍備、日ソ国交など、吉田内閣と異なる政策を掲げる日本民主党の鳩山一郎内閣が成立した。日本民主党は翌年2月の総選挙で第一党となったものの、憲法改正と再軍備に反対する左右両派の社会党

▶1 社会党は1951年、講和問題をめぐってサンフランシスコ平和条約と日米安保条約の両方に反対する左派と、平和条約には賛成する右派に分裂した。

アジア・アフリカ会議 日本を含むアジア・アフリカの29か国首脳がバンドンで開催、「世界平和と協力の促進に関する宣言」を採択した。バンドン会議、AA会議ともいう。



が改憲阻止に必要な3分の1以上の議席を確保したため、鳩山内閣は憲法改正を発議するにはいたらなかった。

社会党は、憲法改正と再軍備への危機感から、改憲阻止、革新陣営結束をめざして、1955年10月に左右両派がふたたび統一した。党内の路線対立が続いていた共産党も、7月の全国協議会で統一を回復した。

一方、保守勢力では、財界の要望や安定的な保守政権を期待するアメリカの意向をうけ、11月、日本民主党と緒方竹虎総裁の自由党が合同し(保守合同)、鳩山を総裁とする自由民主党(自民党)が結成された。

こうして、衆議院議席の約3分の2を占めて政権を保持する自民党と、約3分の1の議席を占める野党の社会党とが国会で対立する、いわゆる55年体制が成立した。この体制は、西側・資本主義陣営を自認する親米保守の自民党と、東側・社会主義陣営に近い革新勢力の社会党という東西冷戦に対応した保革対立の政治構造である。55年体制は、1993年に自民党が下野するまで38年間存続した。

国際社会への復帰

保守合同後の鳩山内閣は、防衛力増強と憲法改正を唱えるとともに、「自主外交」を掲げて日ソ国交問題に力をそそいだ。国連安全保障理事会の常任理事国であるソ連との国交正常化は、ソ連の拒否権行使で国連に加盟できない状況を打開するためには不可欠な政策であった。

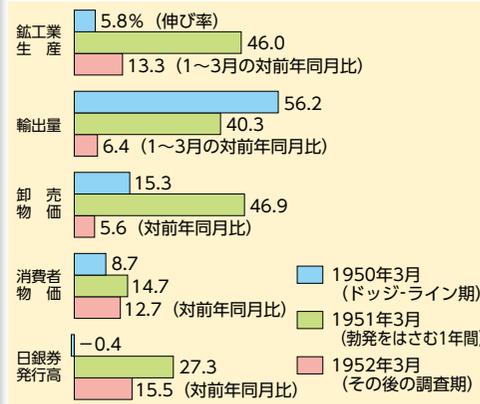
1956年10月、鳩山内閣は、日ソ両国が対立する領土問題を棚上げして日ソ共同宣言に調印した。この宣言により、日ソ間の戦争状態は終わって外交関係が樹立され、ソ連は日本人抑留者の釈放と送還、日本の国際連合加盟承認を約束した。12月、日ソ共同宣言が発効し、ソ連が拒否権発動を止めたため、日本は国際連合への加盟を認められ、23年ぶりに国際社会に復帰した。



鳩山一郎 1951年に追放解除となり、政界に復帰して日本民主党総裁となる。1954年12月から1956年12月まで政権を担当した。

▶2 保守とは伝統や慣習を重視し制度などを急速にかえない態度。革新とは、最新の技術や理解などの知見を生かし、制度などを変革しようとする態度。

▶3 日本は、歯舞群島と色丹島・国後島・択捉島は固有の領土として返還を要求したが、ソ連は歯舞群島と色丹島の平和条約締結後の返還は約束したものの、国後島・択捉島の返還には応じなかった。この北方領土問題は、ロシアに引き継がれ、こんにちも未解決のままになっている。



新幹線の開業 1964年10月、東京・新大阪間開業。戦前の大陸で培われた鉄道技術、戦中期に発達した機械技術、戦後の海外からの技術・資本導入が結集した。

101 高度経済成長はなぜおきたのか

経済復興

アジア太平洋戦争終戦後、深刻な不況におちいつていた日本経済は、朝鮮戦争によって回復へと向

かった。日本がアメリカ軍の補給基地となり、武器・車両の修理や弾薬製造などの特別需要が生じ、好景気（特需景気）を生んだのである。1951年には国民総生産（GNP）が戦前の水準を取りもどした。

政府は、重点産業に国家資金を積極的に投入し、電力・造船などの部門は設備投資を進めたため、日本経済は急速に成長した。農業生産も回復し、1955年以後の米の大豊作によって食糧難も解消され、1956年の『経済白書』で「もはや戦後ではない」と報告された。

高度経済成長

1950年代半ばから1970年代初頭まで、日本経済は「高度経済成長」とよばれる成長をとげた。

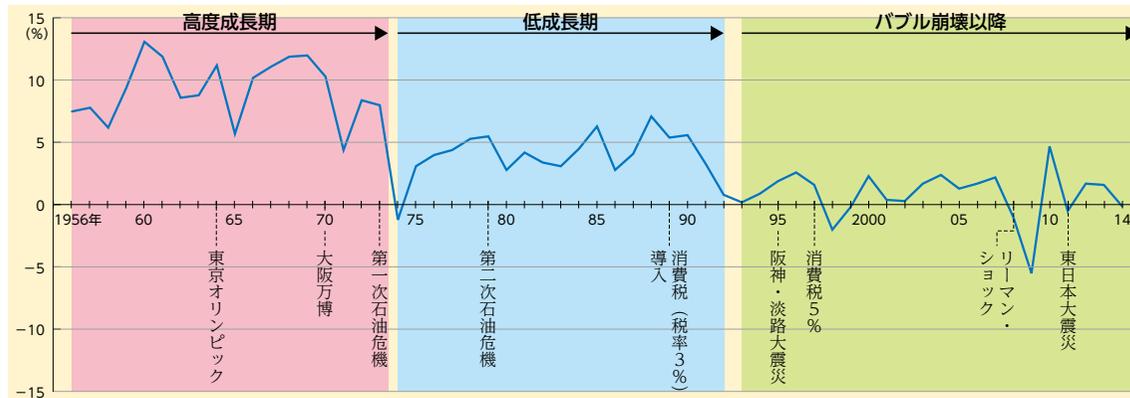
池田勇人内閣は、「寛容と忍耐」、「所得倍増」をスローガンに掲げ、道路・港湾をはじめとする社会資本の充実、大型公共投資、技術革新や設備投資、貿易・輸出の促進による経済成長など、積極的な財政・金融政策を実行した。また、1964年の東京オリンピック開催を前に、東海道新幹線・



池田勇人 広島県出身。大蔵省官僚として出発し、岸信介内閣の通産相を経て、1960年に内閣を組織した。

▶1 経済規模をはかる際に用いられた指標。一国の一定期間（普通は1年間）における総生産額から原・材料費を差し引いたもの。

日本の実質経済成長率の推移（内閣府『平成26年度年次経済財政報告』）



東京オリンピック 1964年10月10日～24日、アジアではじめて開催された。戦後復興と高度経済成長によって経済力をつけたことを世界に示す象徴的なイベントであった。



大阪で開かれた万国博覧会 1970年3月から半年間、「人類の進歩と調和」をテーマに開催された。（大阪府吹田市）

首都高速道路・地下鉄建設などの大型公共投資をおこなった。

次の佐藤栄作内閣も、池田内閣の方針を継承して経済成長優先の政治をおこない、「いざなぎ景気」とよばれた好況は1965年から57か月にもおよんだ。この結果、1960年当時に世界6、7位といわれたGNPは、1968年に西ドイツを抜き、アメリカについて資本主義国第2位になった。

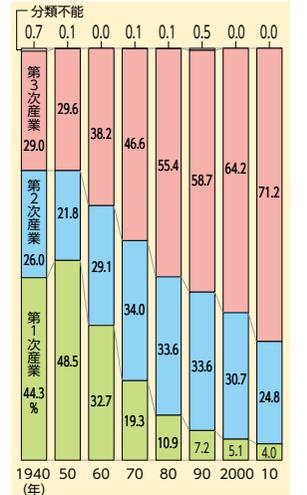
この間、外国からの技術導入と技術革新が進み、鉄鋼・造船・自動車・電子・石油化学などの各分野が急速に発達した。一方、エネルギー源は石炭から石油に転換され、水力にかわって火力による発電が中心となるなど、「エネルギー革命」が進んだ。

高度経済成長により、重化学工業やオートメーションが進み、農林水産業部門（第一次産業）の比重が低下する一方、重化学工業の比重が高まり、太平洋ベルトを中心とするコンビナートの拡大など、産業の立地条件に応じた工業地帯が全国に出現した。

「経済大国」へ

工業製品の輸出は、為替相場が1ドル＝360円と円安に固定されていたことや、エネルギー・原料資源が安価で大量に輸入可能であったことなどに支えられ、鉄鋼・船舶・合成繊維などを中心に急速に拡大した。池田内閣は、貿易や為替・資本の自由化を実現し、経済自由化を推進した。国際通貨体制が安定し世界貿易が拡大したことを背景に、毎年大幅な貿易黒字が生まれ、「経済大国」という言葉が一般化した。

一方、国際競争力を高めるために、企業の合併や合理化などによる産業界の再編も進められ、旧財閥系の住友・三菱・三井などの銀行・商社を中心に巨大な企業集団が成立した。大企業は終身雇用制と年功序列賃金を定着させ、ホワイトカラーのみならずブルーカラー労働者をも含む正規労働者の企業への忠誠・帰属意識を育成するなど「日本的経営」をおこなった。



産業構造の変化 産業別就業者数の割合。（『労働統計要覧』）

▶2 日本は、1963年に国際収支の悪化を理由に輸入制限のできない関税および貿易に関する一般協定（GATT）11条国に、1964年には国際収支の悪化を理由に為替制限のできない国際通貨基金（IMF）8条国に移行するとともに、経済協力開発機構（OECD）にも加盟し、先進資本主義国の一員となった。

これまで学んだ歴史の流れと、「歴史と資料」「歴史の解釈」「歴史の説明」を参考に
して、適切なテーマを設定し、さまざまな資料から探究して、その成果をまとめてみ
よう。

主題の設定

Aさんたちのクラスでは、「日本史B」の学習
のまとめとして、クラスをいくつかのグループに
分け、それぞれ課題研究をおこなうことになった。

生徒A：今まで学んできた近現代の歴史を、地域
と結びつけて調べてみるなんて、どうかな？

生徒B：近くの光が丘公園にある「平和祈念碑」
が前から気になっているんだけど、これをテ
ーマを設定する手がかりにできないかな。

AさんとBさんたちのグループは、通史の学
習をふまえて、「地域からみた戦争・占領・平和
一光が丘の現代史」という主題を設定し、地域の
歴史を対象として課題研究に取り組んだ。

✓ やってみよう

以下を参考に、主題を選んでみよう。どのような
アプローチが可能か、話し合ってみよう。

- 世界のなかの日本＝日本の国際関係の変容を東ア
ジア・欧米なども視野に入れてとらえなおす。
- 地域社会の歴史と生活＝身近な地域の歴史につい
て、地名・産業などに着目しながら自分の生活と
どう結びついているかを考えてみる。
- 社会と個人＝歴史上の人物がおこなった変革や思
想が、その後の社会に与えた影響を探る。



▶ 光が丘公園の平和祈念碑
(東京都練馬区)

資料を活用し、調査する

▶ アジア太平洋戦争と成増飛行場

A：「平和祈念碑」の銘文には、「成増飛行場」や
「グラントハイツ」という名称があるけど、光
が丘とどうかかわっているんだろう？

B：まず、練馬区の歴史に関する本や、インター
ネットから情報を集めてみようよ。

「練馬大根」で知られ、田畑が広がる農村地域
であった現在の東京都練馬区光が丘地域周辺の地
主らが板橋区役所に集められ、飛行場建設の計画
を知り、住民の立ち退きを求められたのは、
1943（昭和18）年の春であった。戦前には緑地
化計画もあったこの地域は、戦局が悪化するなか、
こうして首都防衛の期待を背負って戦争と深く結
びついていったのである。

飛行場の建設は、1943年の8月から、軍人や
産業報国隊・朝鮮人・動員学生らも加えてかけ足
で進められた。12月上旬に完成した飛行場は、
最寄りの駅名から「成増陸軍飛行場」と名づけら

史料

軍事極秘 成増飛行場
飛行場記録 (一部抜粋)

- 一、飛行場呼称及所在地
成増陸軍飛行場
東京都板橋区練馬高松町
- 二、飛行場付近ノ地形特ニ著名ナル地物
1. 関東平野ノ西部地区ニ位シテ東ヨリ
東南ニ東京市街ヲ西ニ秩父山系ヲ望ム
飛行場周辺ハ武蔵野特有ノ波状地帯
ニシテ北側並ニ南側ハ凹地称々大ナリ
北方約五〇〇米ニ成増町南東地区ハ
約四ノ軒ニシテ大東京都市地区ヲ控
ヘ近隣ハ島地並ニ点在スル民家及潤
葉樹林ニ依リ囲マレアリ。尚北方約
六〇〇米ニ東武電鉄南約二軒ニ武蔵
野鉄道共ニ東西ニ通シアリ
- 三、飛行場ノ秘匿及偽装ニ関スル事項
主トシテ上空ニ対シ偽装秘匿シアリ
飛行地区ハ偽装道路並ニ島地ニ偽装
舗装滑走路ハ道路並ニ家屋ノ迷彩ヲ施
シアリ
又掩体ニハ植芝植樹ノ他麦種ノ播種……
(昭和二十年三月十日 第四十三飛行場
大隊)

①練馬区は、東京二三区の最後として、板橋区
から分離するあたりで一九四七年に誕生した。
②東武電鉄・武蔵野鉄道はそれぞれ現在の東武東
上線・西武池袋線。
③戦闘機などを攻撃から守る格納施設。



▶ 成増飛行場空撮（撮影年不明） アメリカ軍のB29による本土空襲
がはじまると、成増飛行場は空襲の標的となり、飛び立った飛行機
による体当たり攻撃もおこなわれるようになった。また、のちには沖縄
戦へ向かう陸軍の特攻隊の訓練にも使用された。



▶ グラントハイツ空撮（1948年）グラントハイツは1.83km
の土地に730の建物が並び、教会や学校・劇場・郵便局・ゴ
ルフ場などを備え、資材や、施設内の暖房を管理するボイラー
棟への燃料を運ぶ、鉄道線路も引かれていた。

れ、千葉県から移ってきた陸軍の飛行部隊が配備
された。しかし、敗戦後にアメリカ兵が残ってい
た戦闘機の処分によって来たとき、残っていた飛
行機は数機だったという。

！ ここがポイント

- 主題に関連した文献や論文を読んでみよう。また、
インターネットを使って情報を検索してみよう。
博物館や資料館の学芸員などに助言をもらうのも
よいだろう。
- 当時の公文書をはじめ、日記や編纂された史料集
などから、テーマに関する記述を探してみよう。
レポートなどに引用するのもよいだろう。

▶ グラントハイツの誕生

A：戦争が終わって、飛行場の土地は軍から返還
されたの？

B：戦後の地図や航空写真があるから、飛行場の
跡地がどうなっているのか、確認してみようよ。

戦後、飛行場のために収容された土地が耕地に
戻され、作付けされたのは矢先、今度はGHQに
よって、進駐してきたアメリカ軍の家族用宿舍建



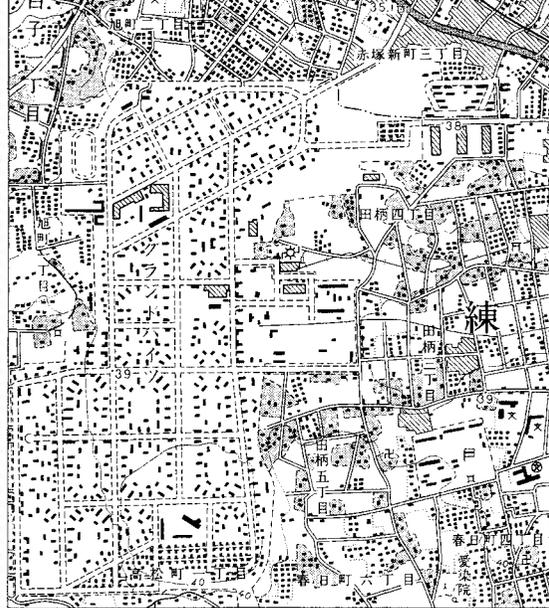
▶ グラントハイツ（右）
とその入り口（1960年
代） 広大な土地に建物
がならぶようすがわか
る。次ページの地形図
と見比べてみよう。



設のために接収されることになった。1948年6
月に完成したその宿舍は、来日経験もある第18
代アメリカ大統領のグラント（在1869～77）
にちなんで、「グラントハイツ」と名づけられた。

グラントハイツは、アメリカ軍の基地同様に金
網に囲まれ、ゲートで入構が制限されていた。練
馬区は、日本人の立ち入りが管理された広大な土
地に、地域を分断されるかたちとなった。

一方で、グラントハイツ内で働く日本人も多く、
住み込み用の寮も備えられていた。また、周辺の
街道沿いには、アメリカ軍やその家族を対象とし
た店が並び、アメリカ人家族と日本人家族の交
流もあったという。戦後の日本人にとって、グラ
ントハイツ内外で目にしたり耳にしたりするアメ
リカ式の生活文化は、驚きであり、またあこがれ
の対象であったかもしれない。



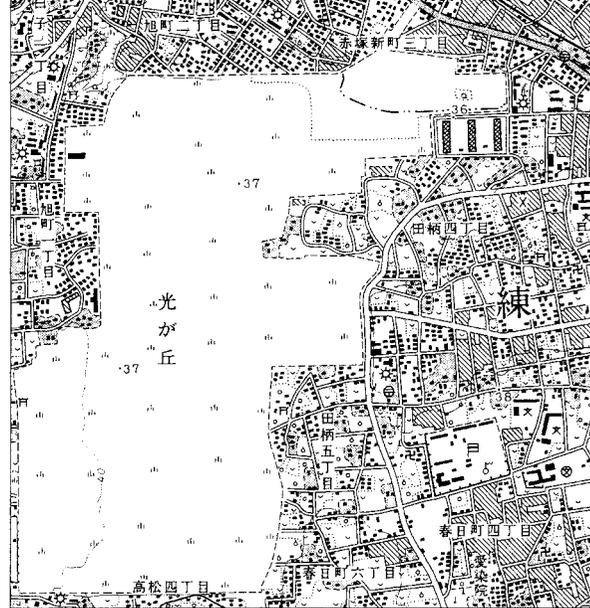
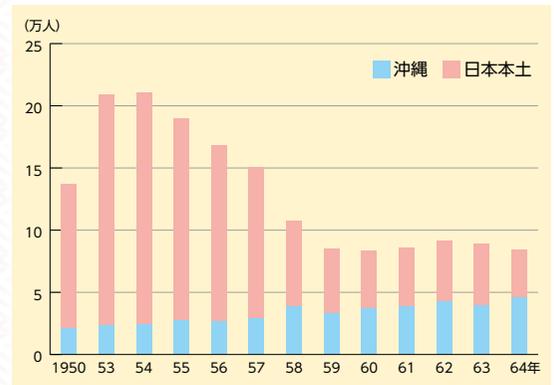
▲ グラントハイツ周辺の地形図（1972年）

▶ グラントハイツの返還

A：そのグラントハイツの跡地が、現在の光が丘団地なんだね。
B：どんな経緯で返還が実現したのか、わかりやすくまとめたいね。

1951年に調印されたサンフランシスコ平和条約が翌年発効し、日本は独立した。しかし、日米安全保障条約も結ばれたことで、朝鮮戦争などを背景に、日本国内のアメリカ軍基地はむしろ拡張された。一方で、日本国内では基地拡張に反対する動きも高まっていった。日本の世論の反発や、世界規模でのアメリカ軍の再編計画のなかで、アメリカ政府は、1950年代末から日本本土のアメリカ軍を、沖縄を含めた他地域や本国へ移動・撤

▼ 在日アメリカ軍人数の推移（「米軍基地の歴史」）



▲ 光が丘周辺の地形図（1976年） 東京都都市計画局による「グラントハイツ跡地開発計画」（1978年12月）には、住宅計画は「都市的スケールの規模であり、23区内で残された唯一かつ最大のもの」とあり、大規模な開発にのぞむ関係者の意気込みがうかがえる。

退させ、1960年には新安保条約が結ばれた。
グラントハイツの居住者も減少するなか、1960年代半ばから、練馬区長が東京都知事に要請をおこなうなど、ハイツの土地の返還と跡地の開発を求める動きがおこってきた。折しも、1967年には東京の都市環境改善をかけた革新首長の美濃部亮吉知事が誕生しており、ハイツ跡地の整備は「広場と青空の東京構想」のなかに位置づけられ、町名を「光が丘」として、自然との調和のとれた理想的な都市づくりがめざされた。

1973年9月30日のグラントハイツ跡地の全面返還をうけ、国や東京都・練馬区などが議論を重ねながら地域の開発が進められていった。光が丘は現在、公共施設や交通網などインフラも整備され、約3万人が暮らす街となっている。

！ここがポイント

- 写真や地図を使うと、土地利用や景観の移りかわりがよくわかるので、活用したい。現地調査をおこなって、現在のようすを実際に観察することも大切である。
- 統計資料を活用し、どのような情報が読み取れるのか、考えてみよう。また、自分たちが調べた内容を、グラフや表など適切なかたちにまとめてみるのもよい。
- 調べたことを年表にまとめてみよう。情報が整理され、推移がわかりやすい。



5 ▲ 現在の光が丘（2014年）

▶ アメリカ軍基地の現在

A：グラントハイツの跡地は返還されたけれど、日本国内にはまだ基地が存在しているよね。
B：基地のある地域の現状や、問題点にはどんなものがあるのだろう？

現在も日本国内には、沖縄県を中心に多くのアメリカ軍基地があり、日本は世界的に見てもアメリカ軍の集中した国である。国内には、騒音の被害やアメリカ軍の軍人による犯罪、原子力空母の入港に対する懸念など、さまざまな問題をかかえる地域がある。アメリカ軍の基地の撤廃に成功した国もあるが、基地の問題は国際情勢に対応したアメリカ政府の戦略に大きく影響をうけるため、解決は簡単ではない。

一方、基地をかかえる地域では、かつてのグラントハイツがそうであったように、アメリカ軍やその家族らと地域住民が交流を深めたり、料理やファッション・音楽など新たな文化を生み出していたりする例もみられる。



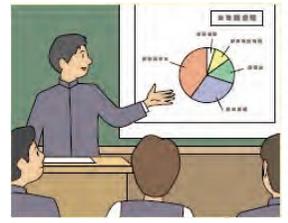
▼ アメリカ軍の原子力空母エンタープライズの寄港に反対する運動（1983年、長崎県佐世保市）



▼ アメリカ軍関係者との交流（神奈川県横須賀市）

調べた成果をまとめ、論述する

Aさんたちのグループは、調査した内容をまとめ、写真などの資料を効果的に提示し、論点をわかりやすく伝えられるように工夫してプレゼンテーションソフトを使って発表した。



✓ やってみよう

- まとめや発表の方法には以下のようなものもある。
- レポートを作成する
取り上げた主題に関する論文や著作も引用しながら、自分の意見も加えてレポートにまとめてみよう。完成したレポートをクラスなどで読み合ってみよう。
 - 歴史新聞を作成する
調べた内容を、ポイントをしばって表現し、適切な見出しをつけたり写真を掲載したりして、歴史新聞を作成しよう。完成した新聞は文化祭などで展示してみよう。
 - ポスターを作成する
調べた内容や資料を、大きめの用紙にまとめてポスターを作成しよう。いくつかのブースを設けるなどして、クラスでポスターセッションをおこなって共有してみよう。

評価する

Aさんたちのクラスでは、各グループそれぞれの発表について、生徒による相互評価をおこない、最後に先生から講評をいただいた。

！ここがポイント

- 自己評価や相互評価などをおこなう際に、以下の点に留意しよう。
- 資料の扱い方や内容の読み取り方は適切か。
 - 取り上げた主題について書かれた著作や論文には目を通し、自分の考えと比較できているか。
 - 調べた内容を理解したうえで、自分の言葉で説明できているか。
 - わかりやすい言葉や図で表現されているか。
 - 文章の読みやすさ、資料の見やすさなどにも留意されているか。